

特213

926

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30<sup>6m</sup> 1 2 3 4 5

始





特213  
926

祖光濱名寛祐著



我が祖語の本地及垂跡



東大古族學會發行



## はしがき

濱名寛祐翁の大陸古語に關する該博なる學殖は、洵に當代の至寶であります。大正十五年翁は「日韓正宗溯源」を著し、東大古族の秘典「契丹古傳」を訓釋し、日韓滿蒙族間、連血同脉の關係を詳論されました。爾來翁の研究は益々進みて、驚くべき未聞の斷案二千餘項を論證し得、之を「東大古族言語史鑑」と題し、將に其の大著を世に問はんとされつゝありました。時に遇々翁の高説を聽き、該著の世に出づるの日を待つに堪へず、先づ請ふて、當春本會の爲めに、九段偕行社に於て、數回に亘り、翁の講演を聽くことを得たのであります。本書は其の際の筆記であるが、實に訂正中翁は略血せられ、重態に陥られた程の熱誠を以て、斯學の爲めにいそしまれつゝあるのであります。

惟ふに東大神族の大輪廓が明かとなり、その民族的傳統や信仰が同源のもので



あることが判然し、漢民族の精神文化なるものは、却つて其の独自の所産では無く、寧ろ此の神族の傳統を着服して自族先宗の衣鉢らしく、粉飾弄文したものの極めて多いといふ事も知られたのであります。之は必然的に、大陸に於ける此の神族の、嚴正なる太古的復興を暗示することも當然であり、又亞細亞神族化の宏謨の堅礎ともなり得ませう。これ等の成果は、現下の形勢上、古典及び思想や信仰の研究には勿論、特に大亞細亞的政治軍事興業關係には、重大なる新條件を提示せられたもので、この信解の有無は、總べてに亘つて其の結果に、著しき差異を來すものと考へられるのであります。

明治維新以來、日本は歐米の文物に對して、その菽麥の差別なく之を取込むに急でありましたが、彼等の仕打や彼等の所産が、氣に入らないといふ事を悟つて以來は、先づ亞細亞を識らねばならぬ當然の趨勢に導かれて來て居ります。遠い他人よりも、血を別けた隣家の真相を解するのが、寔に自然であるので、獨立滿洲國の興れる今日、先づここから検討審究の途が開かれやうと想はれます。夙に

識者が唱へた文献考古學や、又古語に因る民族學とか、東洋の言語學とかいふ様な方面の研究も、東大陸に於ける古族の言葉を理解せぬままには爲し難き所でありませう。

此の小冊子の讀者は、古語を辿つて識り得た東大古族の、神ながらなる天分を感得せらるるであります。而して若し契丹古傳を読まれたならば、東大神族の雄偉なる風格が、更に眼前に迫るを覺ゆるであります。該古傳は大陸の古事記とも見られるものであります。上梓に方り、古稀を越えたる濱名翁の健康を念じつゝ、このはしがきをしるす。

昭和八年夏



上古に我が祖語の本地及垂跡  
於ける

目次

はしがき	.....	一
第一章 三信條	.....	一
第二章 本地の發掘	.....	九
其の一例	.....	九
其の二例	.....	一一
其の三例	.....	一二
言語組立の例	.....	一三
第三章 悠紀主基	.....	一〇
第四章 虚字詞の例	.....	一七
第五章 巫 祖	.....	一四
第六章 祖語發掘の七要義	.....	一七



第一要義	主音	三六
第二要義	約音	四〇
第三要義	古音	四一
第四要義	東音	四二
第五要義	音語住來	四九
一	阿加住來	五〇
二	加波往來	五三
三	太那往來	五五
四	加佐往來	五七
五	佐太往來	五九
第六要義	良音文字の舊音	六〇
第七要義	入聲尾韻と東語	六一
第七章	辰云備考	六五
後にしるす		六五

目次終

上古に於ける我が祖語の本地及垂跡

祖光 濱名寛祐講演

第一章 三信條

爰に祖語の本地及垂跡と申す題下に於て、御話いたさうとするのでありますが、これは私が十餘年の久しきに亘り、古代漢文を基礎として、日夜懈らず、研究いたしました結果を、御披露いたさうとするのでありまして、して其の結果と申しますのは、之を要約するに左の三つの信條を獲得したに歸納いたすのでござります。

- 第一 我が祖語の太古は漢民族以前の支那に在り。
- 第二 故に我が祖語は字音の先天に在りたり。
- 第三 また永く字音と共に居たり。



此の三信條は「古代漢文を基礎とする言語學」の格言たるものでありまして、我が祖先が漢民族よりも古く、即其の以前に大陸に居たと信じられるのでありますから、我が祖語にして漢民族に引繼がれたのが、彼等民族の言詞中にどれだけ多く含まれてゐるか分りません。換言すれば漢民族が己の物として持てる其の文字の音底に、我が祖先の言葉が、如何なる風貌ふうぼうに保たれるかといふ問題なのです。従つて古代漢文の中から我が祖國が多く發見されなければ成らぬ道理があるのであります、されば私の十年研究も、つまり其の發見に勉めたのであります。幸に徒勞に終らず頻々として發見を得ましたのは、自から以て驚異とする所であります。そしてそれを地方別に見ますと、今の山東河北河南山西の諸省が、其の發見の中心であります。勿論我が太古の祖語は、もつと西方にも遠く存在し、小亞細亞方面にも連絡があつたであらうと思はれますが、しかし私の申すのは古代漢文を基礎としての事てありますから、その文獻の存在しない處の事は、他の盛行文字に據つて別に發見に勉むべきであります、それには自から其人あつて存するのでありますから、それ等の人々の研究を待つて、彼此互に引合せ見たら獲る所の者必多大なるべしと豫信し居るのであります。

それも流石は支那です、彼は古代からの文字を、籀篆隸楷と形體を殊にはすれど、又その音

韻に時代の變遷ありはすれど、兎も角も文字の國を以て、文様字體を傳え來つたからこそ、今日に在つても、尙我が祖語が發見されるのであります。しかるに今日では、學界の一部に漢文學を邪魔物扱ひにして、其の廢止をさへ熱心に主張する人のある世なれば、既に其の使用制度も實施され、極く入要のものだけしか、教へられなく成つたのである。通常人には、床間の幅物や坐敷の扁額など、中々讀めない様な事になつて仕舞いました。されば祖語の發見も、其の披露も、今の中にと心急かされる次第、皆様の御同情を仰ぎ度く思ふのであります。

以上の通り三信條の示す如く、我が祖語の大本地は、もと支那大陸でありまして、そして其處で、何千年の久しきを経たか分かりませんが、次第にこの本地が移轉をはじめまして、遂に吾が此の大八洲たいはっしゅうへ遷徙して來たのであります。

そこで舊來の彼地の本地は亡びて仕舞つて、祖語の廢墟と成つたのであります。溯り考へますと、嘗て我が祖先が幾千年の久しき、そこを本地として、言語上の垂跡を、廣い範圍に及ぼし居たであらうと思ひます。北方へも西方へも、西方は中央亞細亞から、小亞細亞乃至歐洲までも、垂跡が及んで居り、南方は、安南、シヤム、ビルマ、夫れから海を越えて南方の島々までも、廣がつたと思ふのであります。



今日ツングース語として、北方民族が持つて居るのも、嘗て彼地へ垂跡した、我が祖語の遺りであるのかも分りませんが、又南方の島々の言葉を調べて、日本民族を、南洋から渡來したものであると、主張する人もありますが、これも嘗て南洋の島々へ垂跡した、我が祖語の残片を拾ひ得て來たのかも知れません。實に我が祖語の偉大なるは、驚くべきものであります。して此の偉大なる祖語を、私は或る範圍の上から、東大古語とも申し、また東大古族の言語とも申しますが、この東大古語の現在の本地、これを何處かと申しますれば、言ふにや及ぶ、我が此の日本であると喝破いたします。

それに有り難い事には、我が日の本は、嘗て他民族の蹂躪を受けた事が無いので、所持の言語を亂されて居りません、故に古代の言語を、古代の儘に持つてゐるのであります。これは世界の何處にも見られない希有の事でありませう。これぞ國語の權威でありますので、この權威に倚りて、東方言語學の創立が、是非できなければならぬのであります。

朝鮮の如きも、其の古代には、言詞がすべて、我が祖語と同一であつたと想はれますが、何にせよ、異民族の幾回ともなき蹂躪を受けてゐますので、今となつては、最早同一と申すわけにはゆき兼ねるのであります。また南洋諸島から、二十や三十の我に同じ言葉を拾ひ得て來た

からとて、只それだけの事で、別に何の權威とも仰がれません、反つてそれ等の零言隻語を執つて、我が日本民族の言語本地を、南洋なりと速断する者に至つては、其の無妄なるに驚かされるのであります。また、我が國語を以て、ツングース語の所屬と爲す者も同じであります。我が祖語の古代の本地及び其の垂跡に就いて、何の識る所もない爲めであります。重ねて復た申しますが、日本の言葉の様に、太古から變はらぬままに、現存してゐるといふ様な國は、世界何處へ往つても見る事は出來ないのであります。

苟も東洋の語學を究めんと欲する程の者は、先づ日本の言葉の世界的なると、太古的になると、權威的なるを悟り、以て之を基礎とすべきもので、歐米人の所爲に倣ひ、我が國語を以て、何處からとも分らない飄流言語と前提して、何處かの隸屬に編入せんとなし、北に持つて行つたり、南へ持廻つたりして、物識顔なるは慎まねばならぬ、國民も亦己が言語に確たる自負心を確持すべきである。してこの自負は、今後の大局に關する所願る切なる者ありと考へるのであります。

例へば、現在の滿洲國獨立事件に就いても、社會の或る部分には、大なる感があるやうであります。即ち滿洲で支那兵を驅逐して、大なる愉快を有つて歸つて來た軍人の或る者の述懐に、



銃を持つて敵を追驅けてゐる時は、愉快の外に何もものもないが、夜虛に居て静を守ると言つたやうな時には、妙に考へさせられる。一體何の爲めに、萬骨を賭してまで争を爲すのか、滿洲國を獨立せしむる爲めにと言ひはすれど、餘所の國を獨立せしむる爲めに、汝等其れ死せよては變である。そこで、滿洲は日本の生命線である、乃ち吾が生命のため、我等は戰ふのであると言ふのであるが、それは滿洲人の前では言ひ悪い。何となれば、滿洲の軍人若くは官吏は滿洲を以て日本の生命線と爲して、満足すべき者でないからである云云。

いかにも其の言ふ所は、成程さうであらうと思はれます。然らば如何なる信念を抱いて邁往すべきかとなると、哲學的原理と謂つたやうなものが見つかからないのであります。そこで民間不逞者流の言分などが出て来て、ヤレ一時的軍閥の威力玩弄であるとか、ヤレ政治家の功名心からであるとか、ヤレ財閥の射利目的からであるとか、實に危険な暗流があるのであります。陸相なども一生懸命になつて、之を國民の義勇に導くべく、骨を折つてゐらるゝやうですが、どこへ之を導かうにも、哲學的基礎の上に於てするのてなければ、恐らく駄目でありませう。時に取つての幸は、祖語の本地が、向ふ岸に在つたことが發見されたのであります。即ち右に申しました三信條の通りなのでありますので、上古に於ける吾人の祖國は、支那大陸に相違

ありませぬ。それが餘儀なき勢に驅られて、北徙東遷したのでありますから、因縁の大理は争へない者で、其の導きに由り、どうしても大望が向ふ岸へと運ばれて行くのであります。そこに神秘の強さがあつて、日清戰役、日露戰役、青島役、濟南役、上海事變、及び現状の滿洲事體など、總て皆この大因縁の支配に由り、その導きに緣つて出發したものであります。即ち祖先が、嘗て骨を埋めたところの、夫の大陸回復の神秘的因縁が解消するのは、何れの日でありませうか、百年の後か千年の後か、我が國民は、進む處まで進まなければ成らないのであります。決して時の軍閥や、政治家のわたくし事ではないのであります。どうぞ皆様方も、我が民族祖先の、大因縁から來て居る、過去であり現在であると、斯様に悟つていただきたいのであります。

此の事は、日本が將來世界に覇を稱ふる上にも、唯一の信條たるものと考へ居るのであります。歐羅巴式の科學的の考だけでは、厥の御國は立つていかないものと、杞憂致して居ります。

然らば、何によつて此の因縁の事實を證據立てるかと言はば、それは、古代の本地を發掘して祖語を取出し、それを陳列して御目にかけるが、一番よい證據と想います。因つて以下これ



に就いて述べることに致します。

## 第二章 本地の發掘

其の一例。

孟子に。自から省みて縮ならば、千萬人と雖吾往かん（自反而縮雖千萬人吾往矣）とありますのに御注意を乞ひます。すなはち吾人は日常の口語に、眞直といふことを申します。又單に直とも申します。又紙を漉ともいひますし、縦のことをスグともいひます。其の他澤山ありますが、このスグといひスクといひますのは、日本語でありませうか、漢語でありませうか。孟子の自ら反りみて縮ならばと言つたのを、朱子が註釋して、縮は直也と言つてゐるのは妙ではありませんか。直の別訓ナホでありますので、自ら反りみてナホければと訓むてゐますが、縮はシユクで、シユの約音はスでありますから、國語とすれば、縮ぎ縮ぐと働くべきです。

また戰國策に、財用に縮ぐれば則ち匱し（縮于財用則匱）とありますが、縮をチヂメルの義に訓みますると、シミタレなれば則ち食乏する、といふ事になります。これはさうでなく、分に過ぐるを縮といつたのでありますから、財用に縮（過）れば則ち匱しといふわけでありま



す。乃ち縮は過なのであります。

また左傳に、以て酒を縮く無し（無以縮酒）と見え、儀禮註に縮は去滓（漉）也とあります。これは、齊の管仲が桓公を助け、覇業を成さん爲めに、諸侯を率ゐて楚を伐ちに往つたことがあります。其の時楚國にも豪傑がゐるて迎へて曰ふに、齊と楚とは、風馬牛も及ばぬほどの遠さにあるのに、何の爲めに師を率ゐて御出になつたのかと問ふたところ、管仲の曰はくに、なんぢの國は、王室に茅を貢納することになつて居るのに、それを懈つて貢納しないので、王室の祭の具そなはず、以て酒を縮くことが出来ずに居る、是れ問罪の第一なり。又むかし昭玉の南巡せらるるや、なんぢの國に於て江に沈み、還りたまはずなりき、是れ問罪の第二なりと。楚之に對へて曰ふ、貢の自然に入らぬことに爲つたは、いかにも寡君の罪でもござらうから、敢て供給しないと申しませむ、したが昭玉の南征して還らざるは、君それ之を水濱に問へ、寡君の知る所ではないと刎ねつけた。との歴史に於て、酒を縮くといふことが見えてゐるが、儀禮の註に、縮は去滓也とある通り、吾人の謂はゆる漉ことであり、又漉こととあります。

また禮記檀弓に、古は冠を縮に縫ひ、今や衞に縫ふ（古冠縮縫今也衞縫）とありますが、縮は直にて、縦の義であります。凡そ縦といへば、眞直のことに違ひありません。

また網を結ふを、網をスクと申しますが、爾雅に、之を繩ふをこれ之を縮と謂ふ（繩之謂之縮之）と見えて居ります。これも矢張り國語の結が、縮の字に由りて現はされて居ります。

以上の如く、國語の直・漉・過・結・縫を、皆縮の字を藉りて著はしてありますが、これは決して漢語ではないのであります。我が祖語の垂跡であるのを、漢人種が、縮の字を假名として寫し用ゐたのが、遂に漢人種のものになつて仕舞つたのであります。こういう例は、他にもまだ澤山あらうと思ひます。

#### 其の二例。

揚子方言に、參蟲は分なり、秦晉にては離といふ（參蟲分也秦晉曰離）とあります。參蟲は今音サンレイであるが、尾韻をつけてさう讀むては、何の事とも分りません。今之を主音で讀むと、參はサであり、蟲ははりであるから、參蟲はサリとなります。故に參蟲（去り）は分（別れ）のことと判りませう。竝に秦晉では之を離といつたとは、この離の古音チでありますので、秦晉では去ること別れることを、離と曰つたとされます。即ち國語の散であります。是れも我が祖語の垂跡として、本と漢語ではないのであります。なほその離（古音）に就いて申しますと、



音書に、司馬仲達の病氣危険を語つて司馬公は尸に居て氣を餘すのみ、形神已に散れり（司馬公尸居餘氣形神已散）とあります。散を今本離に作つてありますが、いづれも古音チでありますので、國語の謂はゆる「散れり」であります。

其の三例。

爾雅に、流に逆ふて上るを汧游といひ、流に順ふて下るを汧遊と曰ふ（逆流而上曰汧游、順流而下曰汧遊）とありますが、五十韻圖第五段の音は、其の第一段の音に通ふこと、東音の常なれば、オコソトノの音は、アカサタナの聲に變じ易いのであります。夫れ故に、汧はサとなりますので、汧游は國語の汧游登方であります。

また流れに順ふて下るを汧游と曰ふとあるは、汧游即ち「去る」であります。爾雅が、國語のサルを汧游とさしたは、實に希代の珍であります。それは古事記に、稻羽の素兔を傳して欺かれつを、欺かえつに作つてあります通り、神代では、語尾のラリルレロをヤイエヨに操つてゐましたので、サルは之をサユと曰ふて居たに違ひありません。それが爾雅に顯はされあが實に珍であります。

蓋し爾雅の書は、周の武王の弟である、周公旦の作と傳えられてゐますが、それほどの物で

ないにしても、古るき或る時代に、それよりも更に古るき、或る時代の言詞を、釋詁釋言したものでありまして、其の中に我が祖語の垂跡なる、汧游（去る）が收められたのでありますから、随分古るい者であります。それを吾人は、平素平氣で口語に用ゐてゐて、小學校の子供さへ、汧游ノボルとも汧ルともいつてゐますが、斯様に古るい言葉を持つてゐて、嘗て變らない國がまたとありませうか。實に世界の誇りと思ふのであります。

「去り」が參差に作られて、「リ」の語尾が差とされ、「去る」が汧游に作られて「ル」の語尾が游となされたるに見れば、嘗て彼土にも、ヤイエヨ若くはラリルレロの接尾詞ありと推せらる。従つて語尾の變化も必ずあつたに相違ない。併しそれは漢語に於てでなく、我が東大語の正系若しくは傍系に於てである。されば公羊傳に、邾は夷、詞後に婁といふと、即ち其の國人は己の國を邾婁といつたのであるが、これは國語で、兒をコロ・家をイヘロ・妹をイモロ、と謂ふ如くあつたのであらう。然らば彼土に於ける古代の言語組立はどうあつたか。

言語の組立の例。

彼土の言語は、總て漢化されたれば、今を以て古を測知し難いのであります。譬へば數詞の如きも一二三の數へ方が、必ずあつたに相違ないが、爾來只壹貳參のみに爲つた如く、すべて



漢化し盡されて、既に千載を累ねたのであれば、當時に於ける言語組立の如何は、之を考へやうとしても、今日と爲つては、全く絶望であります。あきらめるより外ありませむが、試に二三に就いて述べて見ませう。

詩經に、**遐不眉壽・遐不黃耇**とありますのは、遐は遠にて、鄭箋に、**遐不**は**不遠也**とありますので、遐からず眉壽、遐からず黃耇といふことなのでありますが、漢語組立では、**不遐**てなければなりませぬ。それが遐不（トホカラズ）であるのは、東語の語法そのままの漢譯にて、吾人の言葉の組立と同じであります。

又詩經に、**豈爾を思はざらん、子我に即かず**（豈不爾思、子不我即）とありますのも、漢語組立の常法からすれば、**思爾・即我**てなければなりませぬ。それが爾思・我即と爲つてゐるのでありますが、譬へば位に即くといふことも、漢語組立では即位であります。位即ではありますまい。故に**即我**てなければならぬのに、**我即**としてありますのは、彼土に於ける、我が祖語の組立方が、その語調のまま漢譯されて、不思議にも、詩經の中に残つて居るのであります。

また詩經に、**日居月諸・東方自出**とありますのも、自東とあるべきであります。東方自出と

棒讀句調になつてゐるのは、漢語の常調ではありませぬ。も一つ

詩經に、**無庶子・子憎**とありますのは、これまで**無庶**と讀み馴らし來ましたが予れ子を憎ましめ無庶する、と讀むだけか、我が祖語の自然に一致します。そしてこれが漢語ならば、**子憎**でなく、**憎子**とせねばなりませぬ。この詩は、齊侯に罕に見る賢夫人があつて、それが齊侯の朝勤めを怠るを諷諫した作であります。言ふところは、背の君から過分の寵愛を辱ふするは、洵に有りがたい事なれど、これが爲め、君の朝起が遅くなつて、卿大夫など朝登城の者を、空しく歸らしむる結果ともならば、是ぞ私が子を、卿大夫に憎ましむる不來な行ひとなる、憂たてや恩寵を明にするは、子を憎ましめ無庶するらむ、との意味であります。是れは漢民族の言詞とは全く見えません。蓋し此の時代までは、斯かる組立の言葉が、なほ残つてゐたものでありませう。

春秋國語に、**豈於何有**といふ事がありますが、漢語組織なら、宜しく於豈とあるべきであります。

又同書に、**固國之艱急是爲**といふ事がありますが、これなども、其の言葉の運び方が、凡て我が國語調であります。



以上の様に語尾の變化や、言葉の組立ての事を申しましたが、これば皆、周代に入つてからの事でありませう。若し其の前代の殷、更に其の前代の夏に溯り、更に夏から堯舜の時代に溯つて見たならば、どんなものでありましたらうか。其處こそ、我が祖語の本地でありますから、若干の西族が居て、西語（漢語）を操つてはりましたらうが、社稷の主體は、朗かなる我が國語の調格であつたと信ずるのであります。

本日の講演は、これで終りたいのでありますが、皆様の斯學に對する御心得に、私自身の誠めを一言申し述べて置きます。自負に似たれど、私のこの研究は、十年を要したのであります。が、或る時或る友人が來て告げて申しますのに、博士松村任三氏が同じやうな研究をしてござるから、就いて學ばれたらよからうとのことに、急ぎ博士の著書を探し廻り、購ひ求めて家に歸り、大なる期待を以て、忙手緋き見たるに、あけて口惜しき何とかで、實に驚いたのであります。それは凡て日本の言葉は、漢字から出來たのであるといふのでありますが、要するに漢英韻府と玉篇とを左右にし、韻府に據りて支那の時代音を探し、玉篇に據りて字義を求め、そして博士自身が勝手に漢字を組合せ、何ても彼でも、神様の名でも土地の名でも、盡く漢字

をあてはめ、それを以て國語溯源の方式となし、國語を以て皆是れなりと説いたのである。ここに二三の例を擧げんに、

矚目西ヒムカシ これは博士が東ヒナシの原義を是れなりと爲したのでありますが、どういふわけからでありませうか、矚は古音カでありますが、今音はキでありますから、轉じて之をヒとするのは、必ずしも不可ではなからうと思ふが、目を迎ムカとし、それに西シを添へ、以て東ヒナシといひながら、西の字を當ててゐるのは妙です。

燭香フヤコ 博士は月ツキを以て燭フヤの義とし、夜ヨを以て香カの義とし、そこで月夜を燭香としたのでありますが、お月様をラウソクと見立て、燭フヤの香カい様なのが、月夜といふ辭の意味と、しかも眞面目に主張されてゐるのです。

松マツ すべて博士は、今の支那字音に據つてゐるので、松はスングであります。そこで、我々が杉スギといつてゐるのは、松の字音から得たのであるから、松は即ちスギであるといふのでありませう。他は推して知るべきであります。

名居ミヤコ これは都ミヤコの原義ださうですが、斯かる熟語が何處かにありまするのですか、自分で勝手に熟語を作ることは、許さるべきことではありません。こんな自作をせずとも、ミヤコミヤコは廟所ミヤコ



なのであります。廟は今音でもミヤウ所は古音コでありますから、廟所は即ち都てあります。鄙國語の町を鄙だといふのであるが、鄙にマの音があつて、入聲にはマチであるといふやうな事が、漢英韻府でもあるのですがどうですか、詳かではありませんが、町を鄙としたのは、新井白石の東雅に、マチは間道なり、田間の道なりとあるを考へたものでせう。したがマチは之を貿市とするか、古真であります。所謂神農氏が、日中にも市をなして、貿易することを教へたとありますが、貿は音マウ、市は音チでありますから、貿市即ち市街とされます。換言すれば、國語の市街も町も、素と貿易する市の謂ひとされるのであります。支那人が物と金を貿ること、賣買と言ひまするのは、貿易イエキから生れた呼び聲と想はれます。國語でも、市場の取引を、貿交るとか貿交らぬとか申してゐます。

邑市を邑の音だといふのでありますが、なるほど邑は、入聲文字ですから、イチと讀めなことはありません。したが市は井市であります、邑ではありません。支那では、之を倒言して市井といひますが、それは今音に於ての事です。古音では、井をイといつてゐたのでありますしてそれは、凡そ市を立てるのは、いつも必ず井のある處を擇むてやつたので、井がその中心ですから、井市と謂ふが正しいのですが、支那では市井シキ（今音）といひ傳へました。

壹男系・壹女位 これは松村博士の諾冊二尊ですが、爰に至つて最早論議の限りであります。ただ恐れるのは、博士の著書が、英文及び羅馬字綴て出來てゐますので漢字は入つてゐますが、外人に讀めさうです。乃ち之を見た外人は、日本の言葉を以て、皆支那の文字から出て居ると、誤解して仕舞うかも知れません。又日本には、随分馬鹿げた學者も多いのですから、博士の説だといふて、眞に受け入れて仕舞う者があるかも知れない。故に苟も新たに説を立てんとする者は、深く慎む所がなくては叶ひません。

要するに博士の所爲は、漢字を假名にして、彼れ此れと、國語を綴つたに過ぎないのであります。それが、それでは只物好きと云ふまでにて、何の權威もない者です。しかしこれは、國語と字音との或る關係に思ひついた人の、往々にして陥り易き所の事でありませう。今私の志す所は、祖語を其の形のまま、古代の廢墟から掘出さうとするのであつて、漢字を借りて、祖語を組立てやうとするのではありません。しかし過つと、博士のやうな事になりますので、博士を鑑として、深く自己を誡めたのであります。乃ち亦皆様が今後御研究の戒律にもと、かく申述べらる次代であります。



### 第三章 悠紀主基

大嘗會は、申すまでもなく、我が國の大典であります。この大典には悠紀主基の二殿を築かせられ、また豫て太古によりて、悠紀田と主基田を定めさせられ、この二田からの新穀を供へたまふ由に承る。この悠紀主基と申すことの如きは、我が國特有のもので、他の醜國にあるべき言辭ならずと信じて居りましたが、流石は我が祖語の舊本地だけありまして、支那大陸の古へには、嘗て此の語があつたのであります。

さき頃ツラン協會の講演で、古代字音の事を申述べまして、其の一例に、來木年道世代などその振假名が、その字その字の古音であることを説明いたしました。それは速記録にて、皆様の御手許に配付された筈でありますから、重ねては申上げませむが、今夕講演の便宜に、二個の古音を追加いたします、即ちそれは湯の古音のユなること、膝の古音の亦ユなることとあります。湯は水に从ふ湯の字でありますから、太陽の陽と同じく其の音はヤウであつたのであります。

尙書堯典の暘谷を、史記には湯谷に作つてありますのは、是れ暘と湯との同音を示すものです。今音では暘と湯とありますが、これにはタヤ往來の音則といふがありまして、タウはヤウ、ヤウはタウにて、タとヤは、互に往き來する音なのであります。そこで其のヤウの約音がユでありますので、夫の殷の湯王の如き、今音ではタウ王なれど、あの時代の人は、之をヤウ王と崇め、或は約音でユ王といつたかに想はれます。されば玉篇に、今なほ噓常切を保存いたして居りますが、噓常の切は、其の音ヤウでありまして、約音はユです。故に漢の高祖が、沛を以て湯沐之邑と爲すと曰つたのも、沐の古音キであるので、湯と共にユキなのであります。即ち大嘗會の悠紀も亦この湯沐に違ひないのであります。

然らば主基はどうかと申しますに、其の義は蓋し澡禊でありませう。すなはち澡の約音はス禊の約音はキでありますから、約音を以てすれば、澡禊と主基とは全く同語であります。之と同様に、齋戒も亦約音を以てすれば主基であります。要するに、皆我が祖語の、大陸に於ける古代垂跡が、後の漢民族に承け繼がれて、それぞれの文字に保存されて居るのであります。

悠紀は湯沐（古音）にて其の義は雪であります。雪の字音のセツなるは、洗（古音）の入聲なのであります。集韻に雪は洗也と見えてゐます。乃ち洗の入聲が雪なのでありますから、雪



の義は洗なりと判りませう。洗はアラフことであります、ススグことでもあります。されば漢書に、「二女をして其の足を雪がしむ」と見え、戰國策に、燕の昭王が「先王の恥を雪ぐを得ば、孤が願ひ足れり」と曰つたことを載せてゐます。従つて雪には、山海大地を洗淨する者との釋義もついてゐまして、國語の雪は湯沐なりと了解されます。

雪神を膝六風神を巽二といふとのこと、古書に見えてゐて、冬の苦寒のさまを「巽二苦を爲し膝六天に漫こる」など申した文章もあります。そこで考へますに、膝は朕に从ひ水に从ふ字であります。して朕に从ふ字も種々ありますが、朕には古音イヨウとチヨウとの二音がありません。膝と朕との如き、膝は女に从ふ朕の聲、朕は貝に从ふ朕の聲であります。朕の二音がチヨウである所から、膝膝膝の如き、孰れも朕の約音トウを以て聲と致してをります。されば膝と膝とは、本と一音の岐れにして互に相通ふのであります。乃ちこの一類のことを、登與往來の音則と申します。

これに就き傍證を述べますと、字書に膝は涌也とあつて、水の涌き上るを、膝とも涌とも曰ふと知れます。してこの涌は、水に从ふ涌の聲であります。涌にヨウとトウの二音がありますので、涌は一音トウでもあります。それは桶通痛などに見ても分ることです。膝も之に同じ

く、トウでもあり、ヨウでもあるわけであります。

かくの如く膝六の膝は、一音ヨウでありまして、約音ユでありますから六(古キ)の主音キと結ばれば、膝六は雪であります。してその六の字ですが、これをリクと音するは、西周南楚の新しい聲に化せられた結果として、殷音ではキ入聲であつたのです。響へば、遠と陸との如く遠は牽を以て聲として、其の音キなのであります。陸は牽の新聲に由り、其の音リクであります。しかし我が國語では、陸を殷音の舊に由りてキクに持し、其の約音のクを以て陸岸(主音)と詞してゐます。六も亦かくの如く、殷音の舊ではキ、又はキクであつたのであります。これ等音韻の詳細は、別に其の機會がありませうから略します。

以上により、膝六のヨキなることが御判りになつたてであります。ヨキは雪であります。今はユキと申しますが、古へはヨキであつたのです。蓋し之を膝六と云へるは、膝の主音に一致し之をユキといふは膝の約音ユに一致すと申されませう。

ついてなれば、巽二に就いて聊か申し加へませう。巽は今音ソンであります。古音はシンでした。猶孫の古音のシンであつたと同じわけであります。二は出雲地方では、二錢をヌセンといふ如く、東音ではヌであります。それは萬葉集に、荷物の荷をヌといつてあるやうに證明



材料に乏しきを憂へません。されば巽<sup>シメ</sup>二は、我が風神志那の轉音に外ならずとされます。古事記に志那都比古神<sup>シナツヒコノカミ</sup>とありますが、風神巽<sup>シメ</sup>二の名の完きものと想はれます。山海經には、折丹<sup>シヤナ</sup>といふ神が見え、東極に居て風の出し入れをすとありますが、折丹は志那と全く同名であります。して其の折の字は今音セツでありますが、古音はシでありました。

また易にも巽爲風と見え、巽<sup>シメ</sup>(古音)を風のこととしてゐるが、巽<sup>シメ</sup>(古音)は即ち我が國語の風であります。然るにどういふわけか、漢儒は風の古音をヒンと爲してをります。これは風字の古音が侵韻にあつたからであります。それならば、之をシンとしたら妥當であらうに、風<sup>フウ</sup>又ヒウの今音が波行音にある所から、之に縁由して、乃ちヒンと考へたものと想はれます。盍んぞ之を易の巽<sup>シメ</sup>に考へて、風をシンとは爲さざる。若し夫れ、殷音の正を持する我が國語の風に考へて以て巽<sup>シメ</sup>(古音)と爲さば、更に古眞が得られやう。

餘事ながら、膝<sup>ハダ</sup>の古音のヨウにちなみて、併せて膝<sup>ハダ</sup>及膝<sup>ハダ</sup>に就いて、聊か之を説かんに、國語に嫁をヨメといふは膝<sup>ハダ</sup>女<sup>メ</sup>であらう。膝<sup>ハダ</sup>は女を寄することの謂で、周の時代、諸侯が妻を娶る時には、其の夫人の同姓の國から、二たりの女を適夫人に附けて、俱に之を寄せる例になつて居た、之を膝<sup>ハダ</sup>と謂つたのである。つまり娘を他に寄するを「膝<sup>ハダ</sup>す」といつたのであれば

國語に娘を嫁入らすといふのと、其の義全く相通ふのである。されば嫁<sup>よめ</sup>とは膝<sup>ハダ</sup>女<sup>メ</sup>に違ひあるまいと想ふ。

又財を寄するを膝<sup>ハダ</sup>といふ。復言すれば、女を人に寄するを膝<sup>ハダ</sup>となし、貝<sup>たから</sup>を人に寄するを膝<sup>ハダ</sup>と爲したのであります。八百萬神<sup>ヤハヤマンノカミ</sup>といふのも、八百<sup>ヤハヤ</sup>に寄來る神の義が、萬<sup>よろづ</sup>てう數詞に爲つた者かと思はれます。

又膝<sup>ハダ</sup>(古音)は國語の結<sup>むす</sup>であります。即ち國語で結<sup>むす</sup>ぶことをユといひますのは、膝<sup>ハダ</sup>の約音のユを辭とし居るに同じであります。

さて悠紀の本題に立戻つて見ますに、漢初まで、猶ユキといふ言詞が遺つてゐまして、それが湯沐之邑<sup>ユキノボク</sup>と現はれてゐます。漢の高祖は沛の人でありますが、天下を取つて關中に都しました。或る年沛の故郷を訪れ、父老を聚めて大宴會を催し、そして曰ふに、遊子故郷を戀ふ我れ百年の後、吾が神まさに沛に歸つて止まるべし、それ沛を以て湯沐之邑と爲さんと。これは祭の供物を納むる爲めの邑といふことでありますから、大嘗會の時に、悠紀田主基田を御治定相成ると、本義には變りがないのであります。その漢の高祖の故郷と申したところで、本と東夷の地でありますから、我が祖語の遺りが、まだ多く存在するたのでありませう、湯沐<sup>ユキ</sup>の



如き盡し亦それと想はれます。

次に至基に就いて見まするに、殷の湯王が大旱七年の奇饑に、白馬白車に乗り、爪を切り髪を断ち、贖罪の誠を披いて祈つたさまは、どう見ても我が神代の面影に類してゐます。そして其の祈つた處を、桑林之野と謂つたとは、桑林即ち主基にて、更に妙であります。蓋し林は今音リンでありますが、殷音ではキンであつたのです。爾雅に、林は君也とあるのも、其の一證とされます。また桑は約音スであるので、林古主と結ばればスキであります。これは我が祖語の垂跡として、斯く解されるのでありますから、漢儒には絶対に判る事ではありません。そこで何故に桑林之野に祈つたか、桑林とは地名か、まこと桑樹の林なるか、何の信仰禮讃が桑林に在つての事か、これ等の事に就いては、漢儒に何の解釋もないのであれば、桑林之野と謂つたところで、漢儒には何の趣味もないわけである。むかしそんな筈はないので、何か之にはわけが無ければならぬ。即ち桑林を、殷の當時の古音で讀むで、以て之をスキ(主基)と爲さば、義自から深禊に通ひ、白馬素車、切爪断髮齋戒と相絡んで、坐ろに當年を偲ばれませう。湯沐之邑・桑林之野、其の意自から遠してあります。

#### 第四章 虚字詞の例

國語と字音との一致が、只その名詞に就いて見られるばかりでなく、副詞動詞形容詞等に於ても、亦見られるのであります。ここに其の若干に就いて例證いたしませう。

韓詩外傳に、客あり周公に見えんとして曰ふ、入乎將母、周公曰く請ふ入れ、坐乎將、周公曰く請ふ座せ、言乎將母、周公曰く請ふ言へとあります。之を從來「入らんか將た母からんか坐せんか將た母からんか」といふやうに讀んでゐますが、この將母は輕問の詞でありますから入らんか將た母からんかなど云ふやうな、理窟張つた言廻してなく、入らんか將母と、軽く言ひなしたのである。されば將母と音韻するが、國語の自然に叶ふのであります。

管子には、將母を將無に作り、將無已也とあります。すなはち夫所以定齊國者、非此二公子將無已也とあるがそれです。二公子とは、一人を小白といひ、後に齊の桓公となつた者、一人を子糾といひ、管仲と俱に魯に奔つた者である。今のこの時に當り、齊國を定めん程の者、この二公子に非ずして、將無誰を以てするぞと云へるのであります。今迄の讀みのやうに、此



の二公子に非ざれば將無<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>也<sup>（己は以也とあり）</sup>としても、意味は徹りませんが、將無<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>也<sup>（己は以也とあり）</sup>は當時の通語でありましたらうから、音讀した方が、古眞に叶ひませう、して國語との風趣同一も感じられます。

母と無は之を今音で讀むと、些の音差を覺えますが、古へは全く同音であつたのです。例へば尙書の無逸（人名）を史記に母逸に作つてゐる如き、即ち同音の證であります。又後漢書に、飢者毛食とあるのも、飢ゆる者食無しとのことで、毛と無との同音が見られます。

又左傳に、母<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>不可<sup>ニ</sup>乎とありますのを、通じて「不可なる母からんや」と訓むてゐますが不可に母<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>と音讀するが、大陸に在つた我が祖語の古眞に協ひませう。母<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>をムシロと讀みもしますが、善く母<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>・悪く母<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>など、吾々の日常言詞に存するのであれば、特にこれをムシロと讀むにも及びますまい。また論語にも、無<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>太簡<sup>ニ</sup>乎と出て居ります。茲に

莊子に、子無<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>稱<sup>ス</sup>とあるは、無<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>取稱<sup>ス</sup>の謂にて、稱<sup>ス</sup>は諸<sup>ニ</sup>に同じ助辭であります。勿來關<sup>ノ</sup>ナ<sup>ク</sup>コ<sup>ソ</sup>も、無<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>來稱<sup>ス</sup>なれば、莊子の無<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>稱<sup>ス</sup>は、我と同調の詞なのです。國語で「爲<sup>ナ</sup>」を「勿<sup>ク</sup>爲<sup>ス</sup>」と申しますが、それは即ち無<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>取稱<sup>ス</sup>にて、字書に取<sup>ル</sup>爲<sup>也</sup>とございます。取<sup>ル</sup>の約音ス、叶音はせてありますから、爲<sup>字</sup>を訓むてスとなしせとなすは、つまり取<sup>字</sup>を讀むてスとしせとするに同じなのであります。

詩經に、日居<sup>ク</sup>月諸<sup>ク</sup>とあり、詩疏に居<sup>ク</sup>諸<sup>ク</sup>は助語也と出てゐますのは、花<sup>コソ</sup>善<sup>ク</sup>け<sup>レ</sup>・淵<sup>コソ</sup>澄<sup>ク</sup>め<sup>レ</sup>などいふ<sup>コソ</sup>であります。されば、日居<sup>ク</sup>月諸<sup>ク</sup>といへるは、日居<sup>ク</sup>諸<sup>ク</sup>月居<sup>ク</sup>諸<sup>ク</sup>といへるにて、居<sup>ク</sup>諸<sup>ク</sup>の一語を、居<sup>ク</sup>と諸<sup>ク</sup>に分用したのであります。日本の歌に詠む<sup>コソ</sup>の詞か、詩經に有<sup>ラ</sup>うとは誰か容易く心づくべき、全く氣が付かずにゐたのであります。

又その一例には、公羊傳に、其<sup>コソ</sup>諸<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>病<sup>ム</sup>桓<sup>ニ</sup>與<sup>ト</sup>とあります。これは「さて<sup>コソ</sup>以<sup>テ</sup>桓<sup>ニ</sup>を病<sup>マ</sup>しむるよ」の意味でございます。「其」の字は今音キで行はれてゐますが、譬<sup>ヘ</sup>ば期<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>、棋<sup>ノ</sup>盤<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>、「其」を以て聲とする字の音<sup>コ</sup>であるのも多くございます。墨子にも「其」の字を<sup>コ</sup>の音に用ゐてあります。

孟子に、孟子問<sup>ク</sup>齊宣王<sup>曰</sup>、以<sup>テ</sup>羊<sup>ニ</sup>易<sup>ス</sup>牛<sup>有</sup>諸<sup>ト</sup>とあるは、鐘<sup>ニ</sup>に血<sup>ぬ</sup>らる<sup>べく</sup>、牽<sup>カ</sup>れ行<sup>ク</sup>牛<sup>の</sup>しほ<sup>く</sup>と歩<sup>める</sup>を、哀<sup>れ</sup>と見<sup>た</sup>宣王<sup>が</sup>、羊<sup>を</sup>以<sup>て</sup>牛<sup>に</sup>易<sup>へ</sup>と命<sup>じ</sup>、其<sup>の</sup>將<sup>に</sup>殺<sup>され</sup>んとせ<sup>る</sup>を助<sup>けた</sup>とあるを、孟子知<sup>つて</sup>當<sup>の</sup>宣王<sup>に</sup>、此<sup>の</sup>事<sup>有</sup>諸<sup>ト</sup>と問<sup>ふ</sup>たのである。この有<sup>諸</sup>は、諸<sup>有</sup>と讀<sup>み</sup>慣<sup>れた</sup>るが、實<sup>は</sup>吾<sup>人</sup>が日<sup>常</sup>言<sup>ふ</sup>ウ<sup>ツ</sup>・ホ<sup>ント</sup>のウ<sup>ツ</sup>である。素<sup>と</sup>これ輕<sup>間</sup>の詞<sup>な</sup>るが、之<sup>を</sup>倒<sup>言</sup>して諸<sup>有</sup>と爲<sup>す</sup>も、亦<sup>輕</sup>間<sup>の</sup>詞<sup>にして</sup>、然<sup>かも</sup>亦<sup>輕</sup>諾<sup>の</sup>詞<sup>となる</sup>が妙<sup>です</sup>。今



吾人は、ウツといふことを虚偽の事に聴き、虚偽の意に言いますが、名古屋あたりの或る地方では、ソウと承引うけひくことをウツといふ由、蓋し古言の遺りでありませう。また宣王が孟子に、文王之圃、方七十里、有諸ウツと問へるも同じにて、孟子は之に諸有と對へたでありませう。

孟子に、蓋ナシ歸キ一乎オ來ラとありますのは、伯夷が北海の濱にゐて、文王の起るを聞き、なんぞ歸乎オ來ラざると曰つて、文王に歸したといふのでありますが、註に乎來は助語とありまして、我が學界では、古來この乎來に訓のつけやうなしとして、單にこの二字を、ヤとのみ訓み來つたのであります。しかし善く味ひますと、筑紫あたりには乎來といふ詞が自からありまして、日常來乎來ぬか・往乎來ぬかなど、互に申してをります。又來をレにはたらかし來乎來・往乎來とも言つてゐます。其の他地方々々の學校教師など、執れも方言方音を改むるに務めてゐますが、これ等の方言になりますと、實に惜しいものだと思ひます。いかにも言辭としては、「來れ」で足りて居りますが、それに乎來の助辭をつけて、「キオレ」と曰つてゐますのは、言語學上の實であります。また肥後邊で「さうてくさい」とか、「あんたくさい」など申しますのも、詞幹は幾庶ナカにて、幾ナカの義であります。乃ち「あんたくさい」は貴方幾庶ナカのわけと想います。詩の大雅に、靡ナシ國トシ不レ涙ナシとありますのは、國として靡不ナシ（皆）涙びたのであります。論語

に、靡ナシ不レ有レ初ハジメ鮮シ克コト有レ終ハジメとありますのも、靡不ナシ（皆）有レ初ハジメ、鮮克シ（少）有レ終ハジメと云へるのです。かく其の讀めるのは、靡ナシは一音ミであり、不レは東音にヌてありますから、靡不ナシは即ち國語の皆であります。譬へは靡ナシ不レ笑ハシといへば、靡ナシ不レ笑ハシつてゐるのです。靡ナシ不レ怒ハシといへば靡ナシ不レ怒ハシつてゐるのです。

鮮克シの鮮シは古音です、今音では朝鮮といふ如く、其の音センであるが、古音は斯であつたのです。故に鮮克シは、古音を以てすればシコであります。九州では少しばかりといふことをコレ鮮克シといひ、關東ではコレ鮮克シといひますが、俱に殷代以前の古言に違ひありません。して又鮮克シのシがスに轉じ、斯の尾詞がついたのが鮮克シ（少し）であります。

靡不ナシと、不レを奈行音に讀みますのは、謂はゆるの東音でありますが、其の謂はゆるの東音は殷音なのでありますから、直に殷音といひたいのであります。今と爲つては、是れ以上が殷音であるといふ分界がつきませんので、遠慮して東音といふのですが、漢時代にも、東音の稱は猶存したのであります。即ち漢吳音の波行ハを、東音で奈行ナに操つてゐた如きも、亦東音の一音例とされます。

可以コト不レ可以コトは、支那人が可か不可かと問ふ言葉でありますが、國語では之を可コト不レ可以コトとい







## 第五章 巫覡

本夕は字音の講釋ばかりで、定めし御退屈でありましたらうし、肩も御張らしに爲つたでありませうから、齡には羞ぢますけれど、今夕の打止め、一つエロの事を申上げ、御笑を得て解散することに致したい。即ち先づ説文に、也、女陰象也とあるを御披露に及びますが、その也は古音ではタでありました。それは他施など、也を以て聲とする字が、音タであるので分りませう。池の如きも、古音はやはりダでありました。也のダなる知るべきであります。叶音は乃ちトでありましたらう。也字に對する事は、暫くここに御預り申して、巫覡のことに及びますと。

周禮疏に、女陰を巫(今音)といひ、男陰を覡(今音)といふとあります。又曰ふ男陰は之を巫ともいひ覡ともいへど、女陰は巫とのみで覡とはいはずと。按ずるに巫は今音はフなれど、古音はホであつた。覡も今音ダキなれど、古音は戟(古音)と同じく亦コであつた。

古事記に美蕃登といふことが見えてゐて、蕃登は陰戸なりと釋かれてゐますが、其の所謂る

の蕃は巫なのでありませう。其の所謂るの登は也と思はれます。即ち蕃登は巫也にて、亦我が祖語の垂跡が、大陸に認め得らるのであります。されど、也は女陰の象と、定義づけられてゐますから、男子の蕃登は、巫ではあらうが也ではなからう。男陰の登は何かとの行詰りを生じますので、暫く處(古音チ)として置きませう。

女陰は巫也、男陰は巫處、一應の理解をここに止めますが、男陰の巫處も、女陰の稱に引かれて理窟なしに、やはり巫也を以て稱とした者かも分りません。こは後考に俟つ事としますが、俗に男陰をダンベと謂ひ、女陰をも或る地方ではダンベといふ由、ダは蓋し古言の也かも知れません。して男陰の古稱覡(古音)は國語に如何なる關係ありやといふに、世に珍梓(チンソ)といふ言葉がある。その縮んだり延びたりする所から、縮延梓と謂つたのであらうが、梓はやはり當て字にて、本と巫覡なのであらう。ヘノコといふをかきな名のあるのもヘノを切するとホに歸納するから、即ち亦巫覡であります。ヌボコを以て滄海をかきならし、そのホコの滴りから、オノコロ島を生み成せるなど、神傳いとど深遠に拜せらる。

なほ古事記に、伊邪那美神が、火の神を産みませるに由りて、美蕃登焼かえて死したまへるを記し、その火の神迦具土の身體の部分に於ても、亦美蕃登を記してゐるのは、本居宣長も之



を疑ひ、男神にもやはりミホトといふかと、怪しむさまに釋き残されたが、祖語の大陸垂跡には、女陰をも男陰をも齊しく<sup>ホ</sup>巫とあれば、疑ひ自ら之で解けやう。

## 第六章 祖語發掘の七要義

日支兩國ほど、仲の悪い國柄は又とありますまい。獨佛兩國が、仲の悪いと申しましたも、それは接壤の利害關係からで、原因必しも深くないのでありますから、利害の均衡さへ得れば自然に融け合ふわけもあります。日支の氏族關係は、そんな生やさしいわけの事ではありません。之を古への、又其の古へに溯り視ますと、元來我が祖先は、今の所謂支那大陸の原住民にして、其の言語は漢民族以前に、大陸の遠近を籠罩したのであつた。それが終に、東遷北徙、西投南竄の已むなきに至つて、遂に中原を擧げて、之を西語即ち漢語の支配に委し去つたのであれば、天運の循る所、因縁の導く所、吾人及び吾人の後昆は、復古に邁往するを、如何にするも禁し得ないのであります。支那と仲違ひてゐる根本原因は、ここに在るのであります。風景未だ輕々しく感慨すべからず、巴山ここを去つて尙千里でありますから、内に自ら省みて、民族自證のその爲に、大陸に於ける祖語の發掘に執掌せんとするのであります。何故之を發掘と謂ふかとならば、大陸に存した我が祖語の本地が、一朝この大八州に遷つて



からは、舊本地は、即ちその廢墟に歸したれど、そこに埋没せる祖語は、猶克く發掘し得べきに由る。勿論それが言てあり語であり、音であり聲であるので、我が祖語のあれこれを承け繼いで、以て己がものとせる、彼等漢族の語言の底、聲音の裏から、掘出すより外に道はないのであります。因つて今から其の發掘の七要義を、順次に申述べることに致します。して其の七要義とは、第一主音、第二約音、第三古音、第四東音、第五音語往來、第六良音文字の舊音、第七入聲尾韻と東語、この七つの者の取扱が即ちその要義なのであります。

### 第一要義 主音

古し漢民族の祖先が大陸に於て、我が祖語を繼承した時、その有てる謂はゆる漢字を以て、いか様に之を寫取したか、是非それを明かにしなければ成りませぬ。して之を明かにする手段順序は、後代、漢人の爲した所を觀察するが捷徑であります。乃ち近い所に例を求めますと、皇朝通典に、我國のことを記して、毳踏棉ケイタクワタといふ物を載せてあります。之をタンタウメンと音讀したのは、何物とも解りませんが、その尾韻を除けて、主音だけを讀めば、タタメ即ちタタミ（疊）であります。かういふ例が目前に在るに拘はらず、日本の學者は、主音で讀むことに

慣れてゐません。

明史を見ますと、明の天子が足利義滿のために、その處の名山を封じて、壽安鎮國之山と爲し、碑を立てしめたのでありますが、義滿は京都にゐたのであるから、明主勅建の碑があるなら、京都附近にそれがなければなりません。しかしまだ私はそれを聞きません。不思議に懐ひ試に主音で讀むて見ました所、義滿とあるは史の誤で、明主から九州の征西府へ、氣嫌取りに贈つたものであることが判りました。即ち鎮國は、主音チクにて、筑チクのことであり、壽安は安壽アス（阿蘇）の翻案と解かりました。何故に倒言したかと云ふに、論語に迅雷風烈とある如き、迅雷烈風なのであれど、さう言つては雅致を缺くので、わざと迅雷風烈と言ひ成したのである。安壽鎮國も同じなれば、俗を避けて、壽安鎮國と爲したのでありませう。事實は筑紫阿蘇の山を、壽安鎮國之山と爲したに違ひありません。これも主音で讀むだからの事で、韻をつけて讀むては、いつまで経つても分かるわけはありません。

中庸に、悠久は無疆なりとあります。悠久は主音イクタであります。抑も中庸といふ書は、本と東方のものでありますから、我が祖先の言葉が、少なからず發見されるのであります。幾千代かけて祝ふといふは、悠久千代かけて其の無疆を壽シユキヤくこととあります。



また中庸に、辟へば天の覆幬せざるなく、地の持載せざるなきが如し（辟如天地無不覆幬無不持載）とあるは、覆幬はフタにて、大小の差こそあれ、鍋の蓋も是れである。つまり天の蓋せざるなきを謂つたのであります。持載は、後の音語往來の項へゆけば分かるが、持は本音チであつて、古音はトに通ひました。時を單にトといつたのも、時字の古音トに一致した詞であります。して持は、登乃往來の音則に由りて、ノに通ひますので、持載は即國語のノせてあります。故に中庸の言ふ所は、「天の覆幬（蓋）をせざるなく地の持載（載）ざるなきが如し」なのであります。

字音は古代に溯るほど、主音のみとなつて韻がなくなります。即ち悠・遊・尤・怠・焉・般・震・縉・宅・秩・客・月等の如き、この振假名は、孰れも其の字の古音でして、御覽の通りウとかイとかンとかいふやうな尾韻は、どれにもついてゐません、即ち主音ばかりであります。故に祖語の發掘には、主音を以てするを第一要義と致します。

## 第二要義 約音

約音とは、大體に於て反功の歸納音といふ事である。例へば、固安の切を韓と爲す如き、韓

は固安二音の約音といへます。又例へば、貴州のあたりに桂林といふ處があつて、その邊の人は丈低き者を、矐雉といつたさうであります。矐雉を約音しますとキとなり、矐を約音しますとヒとなるので、矐雉（約音）は國語の「低し」に同じであります。何となれば「低し」のクシを反切すると、雉になるからであります。桂林邊では、さう云ふて居たのであります。同時に雉の約音キが、亦國語の雉子に一致してゐる次第であります。

約音は、自ら古音に一致する場合が多くあります。例へば、柴の約音はシでありまして、古音も亦シであります。齊の約音はシであつて、古音もシ、帥の約音亦シであつて、古音もシ、哀は之を反切するとイであるが、古音もイであつた。埃も亦之に同じであります。

また入聲の欲は、之を反切するとユに歸納しますが、古音も同じくユでありまして、入聲に來てヨクとなつたのであります。慾谷鶴の如き、孰れも約音ユであつて、亦いづれも古音臾であります。又例へば

漢書に、史記の鬼谷子を鬼臯區子となせる如き、谷（入聲）の一音を、臯區の二字に著したは妙であります。して見ると、漢代に於け谷の字音は、今の支那音とは異なつて、我が國音のやうに、谷（音谷）と音して、尾韻のクを明かに發聲したものと想はる。字音研究の御參考に、か



くは申加へるのであります。

### 第三要義 古音

古語といへば、其の渉る所廣汎なもので、例令その概約だけにしても、週日の能く辯じ得べき所ではないので、爰には只二三の事實に就き述ぶるだけのことに止めます。

爾雅に、菟奚は歎冬也とあるが、歎冬は國語の所謂菴のこととありますから、爾雅の言ふ所は、菟奚は世にいふ歎冬のことなりと申したのであります。かく言ふただけでは、別に興味をひきませんが、之を古音で讀みますと、菟はフ、奚はキでありまして、フキなのでありますから、言語學上の興味が、油然として之に湧いてまいります。因つて菴の音のフなる所以を聊か辯ずることに致しませう。

兔(今音)と免(今音)とは、本と同字であつて、古音はフでありました。故に漢代の著なる説文には、免字がありません。それは當時只一個兔の字のみあつて、免の字が無かつたからであります。言ひ換へれば、兔と免とが當時まだ分れてゐなかつたからであります。されば養新録にも、免即兔也としてあります。

詩經に、黽勉從事とあるを、漢書に密勿從事と作してあるは、本と黽勉と密勿との同音からであります。乃ち免の古音のフであることが、これで證せられます。また大戴禮の勿勿の註にも、勿勿は勉勉なりとあります。

竝に史記韓信傳に、韓信が俛して膀間を出たことを載せてありますが、俛の音のフなるは免を以て聲とするに由ります。及び管子に、茲免すといふことがありますが、これは五穀の類が實の熟した時、自然に頭を下げて、地に着けるまでになるを君子に譬へたもので、茲は益であり、免は俛であります。乃ちこれ等の立證に據り、菟奚なることが善く分りましたらう。

梟をツクといひ、又フクロといひますが、其のフクロのクは詩經に見えてゐます。先づ詩傳から申しますと、古しへ黎といふ國が、衛の地つづきにありました。それが狄人に侵し攻められたので、黎侯出奔して衛君にたより、因つて寓居して自國の恢復を策しましたが、衛君善く之を遇せず、衛の諸臣亦冷かであつたので、黎侯臣下の者、之を恨んで詩を作つたのが、今の詩經に載つてゐるのであります。詩に云ふ、瑣兮尾兮、流離之子、叔兮伯兮、寤如充耳と。この詩僅かに十六字であります。我が國語が三言までも、中に含まれ居るのは、亦希代の珍であります。







孔子を夫子といふ如き、夫は之を東音で讀めば又であるので、夫子は即ち又シてあります。妻が夫をヌシといふのも亦夫子でありませう。

因つて馮も東音では又であります。楚の屈原の離騷に、馮夷(古音)を水神と爲してゐますのも、馮即ちヌ、夷即ちシてありますから、國語の謂はゆるヌシに相違ありません。夷の古音がチであつたのは、證據澤山であります。一例しますと、揚雄の甘泉賦に、辛夷(國語)を辛雉に作つてある如き、夷と雉の同音を示したものであります。

ここにまた、暴虎馮河といふことがありますが、暴は主音ハてありまして、國語では之に、良音接尾詞を副へて、ハリ・ハルと申します。即ち暴虎は虎をハルことで、張倒すなどいふに同じであります。また馮河の馮は、即ち東音にヌでありますから、馮河とは河をヌクことであります。游泳の法に、拔手といふことがあるが、亦河を馮き渡ることでもあります。馮の東音にヌなる、亦以て證すべきであります。

輟耕錄に、古嶽讀經を引いて、淮渦の水神を巫支祈といふとある。淮渦とは、淮河の渦巻けるを謂へるもの、巫支祈は主神にて、巫はやはり東音のヌであります。これは禹か洪水を治むる時、淮河の中に水神がゐる、禹の治水を妨げるので、遂に之を捕へて鐵の鎖で約し、(此の時

代に鐵の有無は不明であるが)而して之を水中の山の根に縛り付けた。この水神は、水の遠近深淺等を詳に知つてゐたとのことであるが、漢魏の後の晋の世になつて調べて見たところ、巫支はまだ繋がれてゐたが、其の後どうした事からか、何處とも知れず逃げ亡せたといふ傳説であります。或は巫支祈を無支祈にも作りますが、同じく國語の主神であります。

孚甲は乃ち亦ヌカであります。穰のことでもあります。或は符甲に作り、萬物みな符甲を破つて生ずとありますが、この符甲の符も、東語ではヌでありますから、穰穰に相違ありません。是れにて夫馮巫符孚等が、東音のヌであることが分りましたらう。亦以て東音の一例と爲します。

濡も東音ではヌであります。これは略易い事柄で、濡をニユに讀むて、そしてそれを約しますと、ヌとなり、東音に一致します。實例は、前漢地理志遼西郡肥如縣に、濡水といふがあるが東音ではヌであるので、其の地方では濡河と謂つたてありませう。又別に涿郡にも濡水があります。ここには濡を明かに而于の反に讀み、ヌと音してゐました。して其の遼西郡濡水の濡は、開口音の需に呼ばれることになり、需よりヌに轉じ、ヌより又樂に轉じ、遂に今の灤河に爲つたのである。これ東音より、漢音に變り行ける一例であります。



孟子に、孺子の將に井に入らんとすとあるは、童子のことでありますが、その餘に於ては、孺子は皆國語の謂はゆるヌシのこととあります。即ち晋の世子申生を、其の左右の臣下が孺子といへるなど、主の謂ではあれど、決して子供を以て呼んだわけではありません。また其の公子なる重耳に對して、孺子といふたのも主のわけである。齊侯茶已を、隣國よりの使者が、孺子と敬稱せる、茶已の死を悼んで、其の國人が、安孺子を謹せる、孰れも皆主と呼ぶ心からであります。してこの安孺子の安は、兄弟等のアにて、敬慕の詞と思ひます。國語の謂はゆる「おぬし」も、安孺子の同語にて、安於二音の往來に過ぎずとされます。

安於二音の往來は、淮南子に、桑野晏食といふことが見えてゐます。晏は主音アにしてオに通ひ、食はソクにて約音ソなれど、晏食はオソであります。即ち晏食は國語の謂はゆる晩にて日が西方の桑野日の入る名に至つた時を謂へるのである。安のオなる、晏のまたオなる、これを是れ安於往來の音則といひます。

大人をウシといふのも、安孺子（又オヌシ）の安孺を切むれば、ウになるからであります。齊は本と東夷の國なれば、その古言が往々國語に同じなるは、さもあるべきである。是等は言語學上からも、大なる收穫と見做さるべきであります。

また成王のことをも逸周書に、孺子といふてゐますが、幼しとも成王は時の天子でありますから、之に對して孺子といへるは、尊敬の詞に違ひありません。我が神代に、御中主また大國主おんかみぬしまたおほくにぬしなどゐましますは、俱に皆孺子にておはしますであらう。

かくの如く孺孺が、東音にヌである所から推せば、豎の如き、主の如き、また珠の如きも、東音では皆ヌであります。すなはち豎子はヌシに相違なきも、これは目下者に對して云ふヌシであります。主のヌなるは主人にて著し。珠のヌなるは、沼矛にて知れます。即ち沼矛は珠矛戟にて、珠矛戟のこととあります。

### 第五要義 音語往來

音語往來とは、五十韻圖の縦の各行が、行々互に相往來し、横の各段が毎段亦互に相往來するを謂ふ。されば其の縱橫交互の往來は、すべて三百餘目により、そして其の節々から、國語と字音との古代往來が発見さるべきであれば、若し能く之を審詳にして、以て餘濫なきを期せんか、爲に一帙の書を編するも、尙且つ盡し難く想はるのでありますれば、ここでは往來の如何なる者なりやを、數個の事實に徴して申述べ、纒かても之に關する概念を得て戴くだけに



止むる外ありません。乃ち先づ阿加往來の音則からはじめます。

一 阿加往來 これは五十韻圖に於ける、阿行と加行との相互往來であります。即ちアイウエオの各音と、カキクケコ各音とが、互に相往來するのであります。竝に阿行加行とも行内相通の法則と申し、阿行内に在つては、アイウエオの五音が互に相往來し、加行内に在つても亦同じでありますから、單に阿加往來と申しても、二十五目に分けて解説する要があるので、容易の事ではありません。それに今音と古音とが、其の間に經緯されてゐるのであります。例へば今音の倚椅猗漪など、古音では皆アであります。また今音の奇寄崎綺虧危羈靡誼宜など、是等も古音となれば、皆力でなければなりません。その詳かなるは、顧炎武の唐韻正に見えて居ります。すなはち其の中の虧の如き、古音は力であるので、闕と結ばつて虧闕となつたら、國語の謂はゆる缺に一致せずや。

綺釜は、詩に惟綺惟釜とあつて、今音キフなれど、綺の古音カ、釜の通聲ハなれば、綺釜は國語の釜にあらずや。ハとマは往來の音である。

古音の關係を按じて、中庸に、仁は人也義は宜也とあるを讀むに、宜の古音のガなる、既に述べた通りであるから、義も古音ではガでなければならぬ。然るに唐の玄宗皇帝ともある人に

して、古音關係に闇く、書の洪範の無偏無頗違三王之義とあるを讀むて、以て失韻と爲した。それは今音に據りて義をギに讀み、頗と義では韻相叶はずと爲したのである。因つて勅を發し頗を改めて跛と爲すべき旨を天下に令した。以爲へらく、跛と義ならば韻に善く叶ふべしと。焉んぞ知らむ、跛も皮(古音)を以て聲とする字なれば、其の音乃ち亦頗なるを。若夫れ義の古音のガなるを早く覺りしならば、義と頗とて善く叶へりと、心づくべきであつた。これが唐の玄宗である。而かもそれが詔勅なのである。この物笑ひは、當時在廷の儒官、擧げて皆古音に盲目なるの致す所であれど、之に由りて古音の識り難きことも亦知られるのであります。

されば今音の義儀犧蟻など、皆我を以て聲を得た字でありますから、古音は、孰れもガであります。そこで蟻(古音)でありますが、史記漢書などには、蟻を蛾に作つたのが往々見られます。例へば、白蟻を白蛾に、蟲蟻を蟲蛾に作つてある類であります。

阿加往來の音則からすれば、蟻は阿に往くべき音理を以てゐる者とされます。乃ち國語では之にリの尾詞をつけて、蟻といつてゐます。神代に我を稱してアと謂つてゐましたのも、亦この音則に由る、阿加の往來に外ならずとされます。

豈も阿加往來によりてアイに通へば、國語て之をア二と言葉す。蟻の蟻なる亦同じであります。



す。

二 加波往來 寒亥侯弧は、皆夫々今音でありますが、支那音では、之を寒亥侯弧と申し居ります。又海漢渾河等も同様に、海漢渾河と發音して居ります。某博士は、何を調べて論を立てたか解かりませんが、日本へ支那からハヒフへの音で這入つたものを、日本人に、其の發音が出来なかつたので、之をカキクケコの音に受け入れたりと、其の著書にも書き立ててゐますが、どんなものでせうか。

譬へば河の如き、左旁の水は義を表はし、右旁の可は聲を表はしたものであります。江も亦同じく、工は其の字の音を示してゐるのであります。こは決して私の場當論でなく、古人の説なのであります。して今の支那音でも、可は之をコの音に持して、ホの音には持してゐません。それがどうして、河がホでありませう。素と必らず加行音に在つたのが、加波往來の音則に由りて、波行に轉じたものに違ひありません。従つて古への三韓をも、今の支那音に倚りて三ハんだと主張する者もありますが、韓はもと、固安の切てありましたから、固が加行音に在る限り、韓の古音の坎は、死滅するものでありません。それを今支那人がハンと音するは、即ち亦加波往來の音則に由りて、ハンに往いたものであります。

方の字は、今音ハウであるが、古へ之に航の一音がありました。すなはち加波往來によりてハにも來、カにも往いたものと想はれます。従つて方明といふことがありますが、方は音航にて主音カ、明は音孟にて主音マなれば、方明を古主音で讀めば、カマであります。またカモてあります。この方明は、神棚のやうな物であつて、神靈が其の内にも入るとされたものであります。神の稱は、アイヌ語のカモが本で、それを引きついたのであるなど、世に物識りの説多けれど、斯學の努力に依り、古代大陸に於ける我が祖語の垂跡が、幾多顯現し來る此の際、方明も勿論その一に數ふべきものであります。概して明の字の附けるものには、祭祀に用ひるものが多い、祭といふのも明を詞頭に措いてゐるのでありませう。又

明桑もその一例であります。桑は今音シでありますが、古音はチです。明は又モにもミにも發音されますので、明桑はモチにて、國語の餅であります。乃ち明桑は、本と方明に捧げたための稱なのであります。また國語の鴨居も本とは方明であつたのでせう。

久方の雲井なといふは、彼蒼方向であります。彼蒼は詩經に見え、天の異名であります。主音はヒサであります。方向の方は、その字の古主音であり、向は向ウキヤウの約音にて、チヤの切タであります。即ち彼蒼方向でありますが、しかし彼字を、ヒの聲に操るは、今音の事



に屬し、古音はハでありませうから、祖語では、彼蒼をハサと申したてせう、それが何時かヒに轉じて、久方ひさかたと謂ふやうに爲つた者と想はれます。

三 太那往來 男オノのナンなる、耐タイのナイなる、熱ネツのネツなる如きは、直に太と那の往來を自證してゐるものであります。今夕は、殊に道行を要しますから、太那往來の範圍に於て、専ら登乃往來を御披露いたしませう。

登乃往來とは譬へば農ノウをノウと音し、耨ノウをノウと音する類です。即ち耨は、耕耨と云ふにはトクと音し、阿耨多羅アノウダラと讀むには、ノクと音してゐます。是れトとノの相互往來であります。吞ツムを國語にノムといふが如き、亦其の往來の跡が見られます。されば登トキ(主音)の如きも、ノでありますので、國語では之に尾詞をつけて、ノリ・ノル等にはたらかせ居ります。登をミノリといふは、實登ミノリであります。ノボリといふのは、登方トキであります。いづれも登のノに往けるのであります。

乗もチヨウにて、約音はトウ、主音はトであるので、尾詞をつけてノリと言葉してゐます。舒はチヨであるが、チヨの約音トであるので、亦ノに通ひ、ノビ・ノブと言葉します。

淮南子に、鈍閔トシミンといふ言詞がありますが、鈍魯トシロをノロといふ如く、鈍閔はノビであります。

即ち暢トシの義であります、俗には之を、ノンピリと申して居ります。即ち鈍閔トシミンのわけでありませう。

野ノは古音野ノであるので、約音はトであります。乃ちノに往いて、國語の謂はゆる野ノを現成してゐます。又熊野クマノといふは、ノの更に又ノに往けるのであります。

猪イノはブタのことでありませう、之をイノコといふは、猪イノの約音トにしてノに通ひ、豕イノの古音イを冠して、豕猪イノ兒と爲つたのであらう。加ふるに、亥イノも古音イであるから、亥猪イノ兒ともされますが、頗るの古音であります。如何にして國語には、斯かる古音を藏し居るか、淺學の人の解し得る所ではありませぬ。

滌ノも約音トでありますから、亦登乃往來の音則に由り、音ノとなります。そしてノは更に又ノに往きますので、滌ノは又ノに讀めます。書の禹貢に見えたる孟滌ノは、即ち國語の滌孟ノ(沼)であります、詳しく事に別の機會に譲ります。

持は寺ノ(古音)を以て聲を得た字でありますから、古音はトでありませう。例へば左傳に、徒人費といふ人の見えてゐるのを、漢書古今人表に、寺人費となせる如き、當時寺と徒か同音であつたからであります。又史記朝鮮傳に見えたる濊君南閔寺を、漢書に南閔等に作れる如き、



これも亦寺と等との同音を證したものであります。従つて持も古音はトであつたと知れます。持の古音トなるに於ては、ノに通ふこと勿論なれば、持載持古主は國語のノセであります。故に前に申したやうに、中庸の所謂「天の覆幬せざる無く地の持載ざるなし」は、覆幬も持載も我が祖語の、其の書に垂跡せるものとして崇められます。

時も亦寺(古音)を以て聲と爲せる字であるから、古音はトであつたのです。之をトキと申しますのは、書經にも、惟時惟幾とあつて、時幾といふ成語が、早く已に古代に認められますが、しかし單に時とのみで、詞は足りてゐるのであります。萬葉集に、「時に」を刀爾となせるなど以て證すべきであります。

また寺をテラと云ひますのも、百濟あたりの方言で、寺にラの尾詞がついて、テラと曰つたものであります。

四 加佐往來 穢(古音)は、加佐往來に由りて、佐に往き、古へ之にサの音がありました。従つて獻(古音)も齊音ではサでありましたので、國語に酒をさすといふは、獻ツクてあります。穢の古一音がサであつたと共に、牲ヒツも約音サウにて、主音サでありますから、穢牲はササにて神に捧げる物の謂に取れます。尤も神への捧げ物にはさまざまの物がありましたらうが、特

に造字藝術家は、牛を以て大牢となし、捧げ物の最優と爲した所から、乃ち牛に从ひ、穢牲の文字を作つたものと思はれます。

戲(古音)も、加佐往來に由りて佐に往き、國語では之をサ延言の音に操つて居ります。乃ち戲に尾詞をつけてサレと爲し、戲歌ガクなど申して居ります。猫の戲をジャレルといふのも、亦是れであります。洒落シヤレといふ言葉のあるのも、亦戲シヤれではありませんか。

五 佐太往來 修(今音)は人ヒトに从ひ、多(古音)を以て聲と爲し、古音はサでありました。されば多は今音タでありますが、古音はサであつたのです。元來多字は、夕(古音)を二つ重ね、其の主音を以て聲としてゐるのでありますから、其の音のサなるは當然のことです。國語でも多はサにて、萬葉集に、人多ヒタにありなど申してあります。

竝にまた澤サハも古音はサでありました。乃ち亦國語に澤を、サハと申す所以であります。なほ研究中ですが、夥にむかしはハの音あり、梁に亦むかしハウの音ありと考へられますので、國語の多は多夥ヒタであり、澤は澤梁サハであるかもしれせん。

かくの如く多の今昔の異なる、澤の亦今音にタクなる、是皆佐太往來の音則からであります。又左にもむかしタがあつたらしく、隋シヤウ隋シヤウ楯シヤウ楯シヤウの如き、何れも皆左を以て聲を得たる字であります。



すのに、タの音に居りますのは、左にむかしタの音があつたからと想はれます。國語に左をヒダリといひますのも、左の古音のタに關係があるのではありますまいか、後考に俟ちませう。楊子法言に浮蒼海而知江河之惡沱とあります。惡沱は今音オタ、又アタであります。沱は佐太往來によりて、サに通ふが故に、惡沱は一にアサと讀めます。即ち法言の言ふ所は、蒼海に浮んで江河の惡沱（淺）を知つたと云ふのであります。惡沱は國語の淺であります。この惡沱（今音）の二字は、後漢の光武帝が渡つた虛沱河の虛沱と、同音同聲なのであります。山海經には、此の虛沱を虚勻に作つてあります。即ち沱と勻の音相通へるを證したもので、亦佐太往來の音則が知れます。揚子は、前漢の末後漢の初めにゐた、大なる古學者でありまして、自から古學精通を自慢した程の者でありますから、惡沱を淺の義に用ゐたのも、遠く古へを漁つて獲來つたものでありませう。

#### 第六要義 良書文字の舊音

國語では、決して詞頭に良行を措きません。故に羅離屢禮魯のやうな、良行音を體する文字は國語との關係に於て、何とも扱ひ様のない者であります。しかし是れには新舊二音がありま

して、舊音は必ずしも今のやうな良行音ではありません。そしてその舊音は、國語と相渉るもの、妙なからざるを認めます。されど其の詳なることは、一朝一夕に述べ盡し難くありますれば、略ぼ御納得のゆくまでを程度とし、申述べることに致します。

書經に西伯戡黎とあるが、黎は國名であります、して之を黎といふは周音に於てであつて、殷音では、耆てありました。されば秦の博士伏生の尙書大傳には、西伯戡耆とあつて、黎とはありません。察するに、殷音の加行音を、西周南楚では、良行音に取つたやうであります。而して此の關係は、頗る廣きに涉つてゐたのであります。例へば周の釐王の如き、齊では之を「リ」と發音しませんでした。故に齊の釐公の如き、齊人は釐を僖の音に持して居たのであります。従つて周音の來牟も、殷音でキムてありました。漢書に周音に據つて、來牟を釐釐に作りましたが、之を齊音で讀めば、釐は稊でありますから、釐釐は即ち稊稊でありまして、孟子には之を倒言し、稊稊（古音）としてあります。麥（今音）は、來（殷音）を以て聲を得た字でありますので、古音はキてあります。従つて詩經には之を入聲にして、麥をキク又はキヨクの音に用ひてゐます。

來（今音）も周音はリ、殷音はキてあつた。乃ち耒耜は殷音にてキシである、それを孟子は倒



言し、且齊の諺に由り、字を替へて鋤基と爲した。鋤基は即ち耜末（農器）にて、國語の耜末であります。してこの耜の字も之を分解すると、其の音助末であるのが妙であります。管仲子には之を鋤基に作つてありますが、史記樊噲傳には、茲基とあります。して周禮の註に、茲基は今の鋤也と見えて居りますので、茲基が國語の鋤なること申すまでもありません。

かういふわけて、來にしても耒しても、良音のままでは、國語と渉る所あらずですが、之を舊音のキに讀むに於ては、牟來（麥）なり、耜末（鋤）なり、そこに祖語が発見されるのであります。

左傳に、楚王が不羹に築城した事が見えてゐますが、楚人は羹を郎の音に操つてゐたので、史を讀む者は、不羹を音不郎に讀まねばなりません。乃ち東音の加行音が、楚音では良行音であつたと判ります。されば廣雅に見えたる墻垠の如きも、東音を以て之を讀めば、則ちハンカウ主音ハカでなければなるまい。乃ち同書に墻垠（主音）は冢也とある所以である。墻垠を一にツカといふのも亦冢垠であらう。蓋しその冢のツなるは、冢の一音タウにして、タウの約音ツなるに因りませう。

蘿葡も、之を古音で讀めば、カブである。和名鈔は、之を大根のこととし、蔓菁根と別けて

ゐれど、蘿をラと發音するは周楚の聲にて、殷の舊音ではカであつたが故に、蘿葡は即ち國語の蕪であります。之を本草に見ましても、蘿葡は根の短かい圓い物だとしてあります。しかし蘿葡を以て大根と爲し、之を先入主にしてゐる學者は、たとへば和漢三才圖繪の如きは、江州伊吹あたりの、大根の短かく圓きを引證して、やはり蘿葡を大根のことと釋いてゐるのであります。

禮記の檀弓の陳棄疾（人名）吳師を逐ふ註に、陳棄疾を一に陵棄疾としてゐるのは楚の聲だといひます。即ち東音の陳（主音）を、楚音では陵（主音）といつたと知れます。また韻會小補にも、齊人は陵を終といつたとある。齊と楚と其の操音の異なる、此の如きものありとされます。要するに、殷及び其の以前の、加行音・太行音・波行音・奈行音などのうち、西周南楚の良行音に合流し終れる者、甚だ少くないやうであります。

雷も古音はカイ、蘭も古音はカンでありました。又瀾及び漣の如きは、古音ナンでありまして國語の波に一致してゐました。その詳かなるは別の機會に譲ります。

### 第七要義 入聲尾韻と東語



凡そ文字にして、フクツキチの一を語尾に有する者は、謂はゆるの入聲文字であります。して其の東語との雙對は、例へば薄の如き、東音では、ハラであります。即ち薄は草むらの平地で、日本の所謂原の事です。或は郊外を薄といふとあれど、やはり郊外の原を謂つたものであります。また滴は、東語のタリであります。谷といふも滴の謂にて、水の滴來る所なれば谷といふのです。獲はカリにて、國語の狩であり、得はトリにて、とり分の取ること、蹶はケリにて、蹴であります。腹(古音)はハラにて、謂はゆるの腹であります。かくの如く入聲文字の尾韻は、東語の良音接尾詞と、雙對を成してゐるのであります。

諸葛孔明の出師表に、臣南陽に薄田十五頃、桑八百株ありとあるは、地味乏しきを謙遜して曰へるのでなく、薄田(主音)は皇(は)にて、左傳に原田毎々とあるに同じく、薄田は原田にて、國語の畑も亦これなのであります。註して申しますが、原は古音ハにて、詩經に波差と韻を成して居り、田は古音チンにて一音はタン、主音タであります。

是等の音則から、達磨がダルマであるのであります。高句麗では、城郭を溝婁といひ、忽字を假りて、以て之をコルと讀ませ、新羅では、部落をバルといひ、亦伐を假りてバルと讀ませた。又朝鮮では一をイルと音し、日本をイルボンといつてゐます。突厥はすなはち、土耳其機(トルコ)の

寫音と知れませう。

勅(チョク)を「ノリ」と訓みますのは、チョの切トであるので、古音では勅をトクと音しました。トクは、乃ち登乃往來の音則に由りて、ノクに轉じ、そして其の尾韻のクをリに雙對せしめて、ノリと言葉するのである。要するに勅はトク、トクは東語のノリなのであります。

陟(チョク)も勅に同じく、古音トクであり、トク即ち亦ノクであるので、東語ではノリであります。則(チョク)もトクにて、勅陟と同じく、亦ノリであります。徳(トク)のノリなる、度(トク)の又ノリなる、皆同一の音理からであります。

正字通に曰ふ、陟釐は紙の名なるが、之を陟釐と曰ふ所以は、南越の海草に陟釐と曰ふがあつて、それにて紙を造るからの名であると。即ち陟はノリなれば、釐をつけてもノリであつて、淺草海苔の如き國語の海苔は、南越の陟釐と其の名を同うすと謂へます。それで紙を造つたといひますのは、國語の謂はゆる糊入紙(海苔入紙)がそれでせう。塵紙といふのも、塵埃の意味ではありますまい、やはり陟釐を字音のまま、チリに讀むての名であります。

管單て要を得ませんが、先づ以上を以て祖語發掘の七要義と致し置きます。



滌は水溜りのこと、國語の沼であります、禹貢には、通じて猪の字を用ひてゐます。又それを孟猪と書いてありますが、或は之を明猪に作り、或は之を望猪に作り、また明都とも作つてあるが、要するに皆假字なのであります。して其の水溜りの實稱は、滌（猪）で足りてゐるのでありますのに、それに孟・明・望（望）などの、接頭詞を置いてゐますのは、我が國語との關係に於て、頗る興味あるものであります。天之御中主神の御中は眞中とも最中とも謂へるのであります、御・眞・最孰れも讚美の接頭詞であります。禹貢孟猪の孟も、讚美の意の接頭詞であつて、孟（孟）と眞は、彼我ともに、音義並に同じなる讚美の詞であります。して滌は古音ト、通聲ノ、叶音又でありますから、國語の沼に相違なく、それを孟滌と爲せるは、即ち眞沼と謂つたのであります。國語の沼は、恰も之を倒反して滌孟と爲せるに同じ、乃ち是れ沼眞であつて、讚辭を詞後に附したものであります。孟滌の沼眞なる、豈漢語と謂はんや、我が祖語の垂跡にあらずして何ぞ、切に諸君の御留意を希ふわけであります。

## 第七章 辰伝継考

三韓とは朝鮮の古に存した、馬韓辰韓弁韓のことであるが、後韓書に、三韓は皆古の辰國也とあるに依れば、辰は其の大號であつて、三韓は其の部分稱と知れます。従つて三韓の一である辰韓は、其の子國稱であつて、其の上に、父國稱の大辰があつた事を忘れてはなりません。しかし此の父國稱なる大辰の歴史は、影も形も、謂はゆる朝鮮半島に存在しません。それは有りもしない箕子を取込んだため、わざと本來の歴史を亡ぼして、國をからにして仕舞つたからです。幸に漢魏の史に依りて、僅に知ることが出来るのは、辰王の下に、幾多の臣智と稱する巨帥の居つたこととあります。蓋し臣は大人をウシといふに同じシの義であります。智は祖父・叔父などの子、又は雷・蛟・蛇などの子で、父とも懐き、神とも崇むる意の、尊稱詞であります。つまり民から具瞻される上位の者のこととあります。其の臣智等が、大辰王に捧ぐる優呼が、魏志の引ける魏略に出て居ります。優呼とは、讚頌の辭のこととありまして、

臣雲遣支報安邪臨支濟臣離兒不例拘邪奏支廉



と申すのであります。是れは魏略に出てゐる文句であります、こころは

臣雲遣支報ハ神シキ聖ニフル拘邪統治ス

といふのであります。その臣雲遣支報のことは、後に述べますが、すべて我が國語でありまして、嘗て大陸の上古に存した我が祖語が、いつの昔しにか、此處に垂跡したところのあるのを、現證し居る者であります。實に希代の寶でありますのを、濟々たる博士林の如くましますに、曾て一人の之を省みるなきは、要するに、狭き天地の大八洲語などが、大陸に存する所以あるべきやと、高を括つた先入主に、自から己を陋隘にして、究むる所なき爲めであります。なほ豫め註し置きますが、右優呼中に見えたる拘邪は、韓南の一邦國たる、謂はゆるの加羅に聞えますが、ここのはそれでなく、廣く神族を稱して拘邪と謂ふたのであります。秦も、秦韓のこゝに見えますが、周防を秦王と書いたやうなわけで、總ての義をあらはした者であります。

して此の辰王に對する讚詞を、我が國語もて讀み得たは、私に創まつたのではありません。日清戰爭に軍部の囑託で從軍し、日韓上古史裏面の著ある西川權卿が、私に先だつて斯く讀むだのであります。但し臣雲遣支報の五字だけは、流石の卿も、能くは讀めなかつたのであります。のみならず拘邪秦をもつて、秦は秦韓のことにもあるべく、拘邪は加羅のことにもある

べしと、疑を之に存し置かれたのである。處が私が奉天で發見した契丹古傳にも、神頌として左の文が掲げられてあるのです。

辰云繼翅報案斜歐岐貢申釐倪叔旃厲珂洛秦并支廉勃刺差笏那蒙緬  
すなはち之を譯しますと

辰云繼翅報ハ神シキ聖ニシフル神族統治シ群醜猶召ス

であります。してこの末句の勃刺差笏那蒙緬は、魏志には無い文であります、無いのは、恐らく魏志の闕文であります。それを私は、勃刺を群に、差笏を醜に、那蒙を猶に、緬を召すに讀むのであります、伊豆の伊東に住ひせらるる河西天放君は、之を「群醜な騷擾」と讀むて送り越されました。いかにもさう讀めもします。孰れにするも、古代の此の珍章が、悉く我が國語で讀めるのが、うたた又珍であります。

さて辰云繼翅報の義解であります、契丹古傳に見ますと辰云繼翅報義猶言東大國皇也とあります。これは西川權氏も、まだ知らぬ所のこととありますが、之に見ますと、魏志の臣雲遣支報も、東大國皇の義なること勿論であります。

又同傳に、堯興舜者東國翅報也ともありまして、堯舜を、東大古族の君靈と申してゐます。



蓋し辰シ云ク縫フ翅シ報フは東大國君靈の義で、辰とは、易に震（古キ）は東なりとある如く、東大古語では東を指して辰と謂つたものと想はれる。本居平田等の諸先達（ひがし）が、東といひ西といひそのシは風にてカゼのことなりと告げられたは、姑くそれとして措きたし。してこの際の事としては、易に帝は震に出づとあるのが、頗る考慮の中に置かれます。帝とは伏羲氏を謂ひ、震は東を謂へるのです。因みに註して申しますが、震は古音シにて、シの尾韻は無かつたのであり、辰・縉・申など竝に皆同してありました。

次に云は大にて、于・迂・宇など、皆大の義を有つて居ります。國語でも海は大水、宇佐は大澤でありませう。鷓澤といふ姓の如きも、鷓はやはり大の意味からと思ひます。

次に縫は國でありますから、辰云縫の東大國なる、疑なき所であります。是れ契丹古傳が、之を東大國皇と釋せる所以、皇は翅報にて、君靈と判じられます。

察するに辰云縫翅報は、古代東族の一大靈語であつたてせう。故に其の關する所極めて廣しと考へられます。それがあらぬか、今學界で喧しく取沙汰されてゐる通克斯も、この辰云縫翅報の傳稱にあらずやと想はれます。即ち辰は一音チであつて、詞頭に置かるれば、ツに轉じ易きもの、それが北方沍寒の地の鼻聲に發すれば、ツとなること勿論であります。翅報は之を

合聲すればスとなります。ところで、之が果して通克斯なるに於ては、之を族稱とせる彼れ通克斯人は、その言語の大體が、我と同じものでなければなりません。何となれば、辰云縫翅報（チンウンフウシホウ）てう靈語が「神しき聖にしふる」などいふ、我が國語の上に顯現したればである。換言すれば此の靈語の存する處は、必ず我が祖語の存する處と、斷言し得べきに因る。乃ち此の豫斷を以て、支那の上代を一瞥せんか、先づ髣髴されるは、彼の神農氏であります。

神農は古へ之を神由といへりとのこと、楊慎の鉛丹錄に見えてゐますが、いかにもさうであらうと肯かれるのは、藤の古音ユに通じて、國語の藤六（ユ）（雪）を成語し、藤の古音ユに通じて國語の藤（結）を因縁するなど、其の例少なからずあれば、農の由（主音）なる、固よりのことでありませう。して其の由は憂と同聲同音にして、憂にウの聲ある如く、由にも亦ウの聲あれば、神由（叶音）は乃ち辰云に幾してあります。して見ると、神由（神農）と神格された其の古語は、東大古族の靈語なる、辰云の範内に存したものとうけられやう。

神農氏に易つて興れる軒輶氏（黄帝）の一號は、雲でありました。縉雲は即ち辰云なれば、亦東大古族靈語中の者に相違ありません。換言すれば、辰云の靈語が、黄帝には縉雲と顯はれ神農には神由と現はれるのであります。



既に申した通り、辰伝の靈語は、我が祖語の上に存したのでありますから、辰伝の靈語の存する處には、必ず祖語の存在が無ければならないのであります。然らば如何なる祖語が、其處から發見されたかといふことになりますので、乃ち先づ黄帝の姓稱と傳へられた公孫に就いて見まするに、孫は古音シンであるので、公孫は即ちクシであります。蓋し公孫は、奇しき聖のクシと同じであります。高千穂の久士布流峰のクシと同じであります。備前田比賣のクシと同じであります。又公孫はコソにて、社のことにも取れます。社は神のゐます處の稱なれど、亦以て神のこととして稱へもします。

黄帝を軒轅氏といふは、軒轅は車にて、帝創めて之を造れるに由り、乃ちこの大號ありといひ、或は曰ふ、軒は冠なり、帝創めて冠を造れるに由り、乃ちこの名ありと、或は曰ふ、軒は冠なり轅は車なり、帝創めてこの二つの物を造れるに由り、因つて軒轅氏と稱すと、或は曰ふ軒轅は地名なりと。斯くさまざまの説き方もありますが、もと神話からの傳説なれば、如何に解釋するも、其の人の意のまゝですが、私は軒轅をクエと讀むて、我が神代史の久延比古と爲し、二者を以て古代神話の同名者と考へたのであります。久延比古の名に就いては、カガシとか、ソホトとか、クヅレカカル者だから、壞の義に於てクエヒコといふとか、亦さまざまの説

もあるが、足なくして、天下の事を普く識り盡してゐる神と爲せるは、此の神に對する讚美であります。軒轅は即ちそれであつて、足なくして天下の事を知る唯一の物なれば、之を大號とする黄帝は、クエでなければなりません。

然らば黄帝にも、亦比古の稱がありやといふことになりましたが、その稱は黄帝の宰相に依りて紀念されてゐます。即ち宰相の名の、風后がこれであります。風は古音ヒン、主音ヒであるから、風后はヒコであります。乃ち軒轅風后といふ稱が、我が祖語を以てせる、古代大陸の神話中に存在したるを疑ひませむ。但し軒轅も風后も、其の文字は皆假名にて、久延比古と書けるに同じであります。

さて復重ねて公孫に就いて按じまするに、太昊伏羲の名を、華胥と傳へてゐます。華には加行波行の兩音あつて、支那では之を音ホに操つてゐますが、之に對し日本では、音コに持してゐます。そこで華胥はコソと讀めるわけですが、私は之を社の義に解し居るのであります。してその謂はゆるのコソは、浪花の比賣古曾神社など、其の他、古曾のつける神名少なからず存してゐます。伏羲の母の華胥も、正に亦比賣古曾の神であります。

列子に、黄帝が華胥之國に遊行したことの記事がありますが、華胥即ち社でありますから、



神の住居すまひの其の國に遊んだわけでありませう。乃ち神遊なのでありますから、地を離れて高く空間にも坐臥し得、中國を距ること幾萬里とも分りませんが、唯是れ瞬間です。亦唯自由のみあつて絶對無障礙なのですから、黃帝の其處に遊べりといふは、心を神の住居の社やしろに遊ばしめたのであります。恐らく是は黃帝の姓稱公孫こうそんを翻案して、社やしろと爲せるに因る物語りなのでありませうが、従つて華胥の公孫にして社の義なることも分るわけでありませう。

ここに又殷の湯王の宰相に、伊尹といふ大賢人がありました。其の傳説に、神あつて伊尹の母に告げて曰ふに、明朝水中から太陽が出るのを見たならば、東に向つて走り、決して後ろを見反つてはならぬとのことでした。明朝になると果して太陽が水の中から出だしたので、夢中になつて東へ走つたのですが、後ろを振反つて見たところ、村閭盡く一面の水になつてゐました。後ろを見たからではありませんが、伊尹の母は忽然化して空桑になつて仕舞いました。其の空桑から、赤兒が産まれたのを、有辛氏の女が、桑採りに其處へ往つて、赤兒を拾ひ取り、抱いて歸つて育てたのが、伊尹であるといふのであります。然しその空桑といふことが、漢儒には能く分りませんので、或は以て地名と爲し、或は以て良材の桑樹と爲し、琴を造るに足るものと説いてゐるなど、諸説區々であります。空は古音コウ、主音コでありませうから、空桑は

乃ち亦コソである。つまり伊尹を以て尋常の産でなく、神の兒を社やしろから得來つて、育てた者と爲したのであります。

また尙書堯典にも、藝コッ社やしろがありますが、これ等に據つて見ますと、國語の社は實に古い言詞であります。して其の太昊伏羲や神農黃帝は、我が祖語を以て説かれた神話中の者に違いありません。神話自體を信ずるか、信ぜざるかは別問題として、神話の中なる古代言詞を味ふことは、民族自證のその爲に、極めて必要な事と思惟し、かくは御紹介するのであります。

かくの如く辰しんの靈語が、神農氏には神由しんゆと現はれ、黃帝には縉雲しんうんと顯はれてゐますが、この顯現は、軒轅けんえん(久延)・風后ふうご(彦)・華胥かこ(社)等と共に、我が祖語垂跡の中に於けるのでありますから、先の豫斷に違はないのであります。

これに就て、太昊伏羲にしたところが、亦我が祖語の神格化された者と判じ得られませう。すなはち太昊たう(主)は、天の其の高きに位し居れるを形容した詞で、我が高天原たかまはらの高と、異なる所はありません、こは何人も異義のない所でありませう。伏は今音はフクであるが、古音ハクにて、易にはこれを庖犧としてあります。即ち庖の入聲が伏ふく(古音)なのでして、その入聲尾韻クの對音は、さきにも申し述べました通り、ラでありますから、伏羲はハラガであります。







概略ながら判ります。

肅慎が果して靈語の辱<sup>シツツ</sup>を體して、其の名としてゐたのなら、彼等の言語は我等と同じ著である。されど如何なる文獻にも、これが肅慎語であると、區別した者のあらうわけがないのである。今と爲つては知るに由なき事である。たゞ山海經に見るに、肅慎の國には雄常といふ樹があつて、中國に聖人が出て君と爲る時は、その樹に皮を生じ、採つて以て衣と爲すことができるとしてある。常は昔し裳に通へる字にて、約音ソなれば、雄常は即ち國語の木綿衣である。或は雄常を雉常に作つたのもあるが、雉はもと各を以て聲としてゐる字で、東音(殷音)ではカク、一音カウでありますから、雉常は國語の楮と分ります。亦以て皮を採り、衣に造ることの出来るものです。只この一事であります。微なる指紋も其の人の全體が分るやうに、肅慎語も大體に於て我と同じとされませう。

武王が箕子を朝鮮に封じたといふは、肅慎に封じた事を謂ふのです。契丹古傳には、箕子といふ稱を認めず、別に殷叔と號し、辰<sup>シツ</sup>辰<sup>シツ</sup>殷<sup>シツ</sup>王國の創建者と爲してあります。これに據ると、武王は殷叔を朝鮮に封じたに違ひない、併し殷叔は之を斥けて受けなかつたので、封朝鮮の事は空名に終つたのであれど、周の史室には、朝鮮の稱が永く保存されたに違ひない。して其の朝

鮮の稱は、肅慎の異譯にして、禹貢の鳥夷より由來せる者であります。

清皇室は、古肅慎を以て自らゐた者でありまして、乾隆四十二年八月十九日の上諭に、

我朝肇興舊稱滿珠、所屬曰珠申、後改稱滿珠、而漢字相沿爲滿洲、其實古肅慎、爲肅申轉音也。

とあります。すなはち清皇室は、其家系を以て、古の肅慎氏を繼げる者なりと、天下に公言したのであります。言ひ換えれば、吾が家系たる、遠きは即ち肅慎、近きは即ち女真といつたわけがあります。何となれば、女真は本來朱里眞であつて、素と肅慎の稱を繼承した者なるに由ります。

又匈奴に就いて一瞥しますと、契丹古傳に匈奴のことを弁那と謂つてゐますが、其の義は詳てありません。して又申しますに、弁那に二汗落があつて、一を縉<sup>シツ</sup>縉<sup>シツ</sup>伊<sup>シツ</sup>返<sup>シツ</sup>氏と曰ひ、一を縉<sup>シツ</sup>縉<sup>シツ</sup>刀<sup>シツ</sup>曼<sup>シツ</sup>氏と曰つたとあります。蓋し二汗落とは、二王族のことと、汗落はやはり神族の義であります。して伊返は稜威なるべく、縉縉は即ち辰<sup>シツ</sup>辰<sup>シツ</sup>で、東大の義に違ひありません。他の縉縉刀曼の刀曼は、オトマン帝國のトマに繋りがありますか、皆様の中には、ツラン民族の研究に勉められる方々もありますので、併せて御研究を願ひたいのであります。



史記に匈奴の單于を頭曼と曰ふとあります。單于とは王といふことであつて、古來單はゼンと讀まれてゐますが、一音はシンであり、またチンであります。すなはち一先の韻ではセン、十四寒の韻ではタンであるが、古へ十一眞の韻に在つた時には、シン又はチンであつたのです。そこで單于を主音で讀むと、辰<sup>シ</sup>云<sup>ウ</sup>になりませう。蓋し亦東大の義を體した者でありませう。單于が果して辰<sup>シ</sup>云<sup>ウ</sup>の靈語を體して之を稱した者ならば、その匈奴語は、大體に於て我と同じてなければなりません。何となれば、辰<sup>シ</sup>云<sup>ウ</sup>は、辰<sup>シ</sup>云<sup>ウ</sup>捷<sup>ツ</sup>報<sup>ホ</sup>の靈語は、我が祖語の基礎の上に存在した名なるに由ります。困つて匈奴語に就いてしらべましたところが、

漢書に、「匈奴は天を謂つて撐<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>と爲し、子を謂つて孤<sup>コ</sup>塗<sup>ト</sup>と爲す」(匈奴謂天爲撐犂謂子爲孤塗)とあります。その撐<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>は、之を延言すればタリシであります。それに又美の讚詞か副はれば、撐<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>思<sup>シ</sup>美<sup>ミ</sup>孤<sup>コ</sup>塗<sup>ト</sup>にて、天皇をタラシヒコノミコト、皇后をタラシヒメノミコト申上げますと同じではありませんか。

北史に倭王姓阿每字多利思比孤とありますのは、我が言詞の彼土に運ばれたのが、著はされたのでありますが、匈奴語の撐<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>孤<sup>コ</sup>塗<sup>ト</sup>と、音義俱に合致してゐるのは、寧ろ驚異であります。獨りこれのみではありません、匈奴語には我と同一のものが他にも發見されてゐます。

なほ匈奴に命といふ語のあつたことは、史記索隱に葉隆志を引いて、匈奴の先の一王を、**聿**裏<sup>シ</sup>眠<sup>ミ</sup>阿<sup>ア</sup>堆<sup>ト</sup>といふとあります。聿<sup>シ</sup>裏<sup>シ</sup>は即ち漢書の撐<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>、阿<sup>ア</sup>堆<sup>ト</sup>は即ち孤<sup>コ</sup>塗<sup>ト</sup>であります。漢<sup>漢</sup>には眠<sup>シ</sup>の讚詞が闕けてゐます。しかし之に依りて、匈奴人が我と同じやうに、眠<sup>シ</sup>阿<sup>ア</sup>堆<sup>ト</sup>と謂つてゐたは、確かなる史實であります。

史記に、單于姓攀<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>とありますが、タリミコトなどいふ詞をもつ匈奴が、良<sup>ラ</sup>行<sup>コ</sup>音<sup>シ</sup>を詞頭に措くわけはないと思ふのです。朝鮮でも、今なほ之を詞頭に措いてゐません。例へば李王の如きも鮮人は李をイに發音してゐます。されば攀<sup>シ</sup>犂<sup>リ</sup>は、犂<sup>シ</sup>攀<sup>シ</sup>の倒反ではないかと思ひます。何となれば、東語との關係には、相互に倒反の例が少からず見られるからであります。若しこれが犂<sup>シ</sup>攀<sup>シ</sup>ならば、犂<sup>シ</sup>は古音チにしてツに通じ、攀<sup>シ</sup>は一音ランでありますから、丁<sup>チ</sup>靈<sup>リ</sup>と與にツランと讀めます。諸君が研究されてゐます謂ゆるのツラン民族は、古へに在つての丁<sup>チ</sup>靈<sup>リ</sup>民族で、匈奴の姓稱犂<sup>シ</sup>攀<sup>シ</sup>とも相關する所の者ありはしませむか、これは御參考までに供します。(丁<sup>チ</sup>靈<sup>リ</sup>又は丁<sup>チ</sup>零<sup>リ</sup>は貝加爾湖の西南方に居りし者、匈奴の爲め西方に驅逐されし民族。)

以上述べ來つたやうに、辰<sup>シ</sup>云<sup>ウ</sup>の靈語は、神農の神由、黃帝の縉<sup>シ</sup>雲<sup>ウ</sup>、匈奴の縉<sup>シ</sup>松<sup>ウ</sup>、其他鳥夷肅慎・珠申・女眞(朱里眞)等に亘つて、皆驗ありてありますが、我が日出の處はどうか、亦



あはせ考ふべき者ありやと云ふに、

山海經に、大海之東・大荒之中・有思幽之國とあります。そして思士は不妻・思女は不夫とあります。してこの思幽は、辰運の同語として東大の義に取れ、また思を伊志往來の音則によりて古一音のイに讀めば思幽は息吹の義に取れる。してその土女が婚をかはずに、氣相感じ相通じて、それで子を成すとあるは、何かはしらず、天照大御神と須佐之男神とか、天安河を中にして相對し、與に俱に、氣吹の狭霧に成りませる、諸々の神々を産ませたまひし、神業に想ひ到らしめられます。しかも之を大海の東、大荒之中の事としたは、我が國より外になり。山海經はどうして、我がこの神事を其の書に載せ得たものか、今のところ我が神話が向ふに傳はつたのであると云ふ外あるまい。

山海經は、何時出來た書かといふに、後世の加筆もあり、從つて偽書と疑はれるふしもあるが山海經を奉ずる者は、之を禹の時の著と信じ來つてゐる。果して禹の時代に、天照大御神のかわざが、向ふに傳はつたもの乎どうか。それほどの古書にあらずとしても、漢の司馬遷が史記を作る以前に、此の書のあつた事は明かて、遷が言に「山海經の怪物は我知らず」とあります。それが何れの時代にもせよ、思幽の國か海東に在りと爲したは、我が一般學界に於ても

深く研究すべき事項でありませう。是に於て又思ひますのに、辰運縫翅報を契丹古傳に依つて東大國君靈と讀むて來ましたが、是は契丹が古を付度しての解でありますから、どういふ誤解がないとも限りません、若しや辰運は東大の義でなく、息吹の義なる思幽の靈語ではありますまいか、偏に後考に俟ちます。

山海經に、有東口之山・有君子之國とありますが、やはり大海之東・大荒之中なのです。これに據れば、東口の山ある處、即ち君子の國なのでありますから、東口君子の合音はツクシであります。乃ち我が筑紫の事でありませう。そしてそれは、辰運縫翅の辰運の約ツてありますので、筑紫と辰運縫翅を紛ひのない同語とされませう。すなはち其の辰運縫翅報は、辰の叶音ツ、翅報の合音スでありますから、讀んで辰運縫翅報と爲せます。乃ち亦通克斯でありますんか。されど今の謂はゆる通克斯種族を以て、直にそれと爲すのではありませんが、其の名の類似より推して、彼等も亦太古に於ける、我が祖語の基礎上に存した靈語を遠く傳へて、族稱に冒せる者と爲すを得べきか。夫の虞舜の如きも、舜の言たる充なりとの解あれば、舜の充なるも即ち辰運にて、亦東大の義を體すといへませう。しかし何れも人々の第六感に由る受得なれば、我を以て人に強うることは勿論できません。



たゞ我が學界に於て、早く認めて貰ひたいのは、我が祖語が、漢民族以前の支那を主宰して其處に大なる神話を有してゐたことである。その正系は、この大八洲に齎らされて、縮圖されてはあれど、女媧氏の天變地異の如き、是亦我が祖語中の神話なのであらう。

蓋し女、は、伏羲から神農に至る間の大天子でありますが、その大號が女媧と寫音された爲め、或は伏羲の妹などいふ説もありますが、審に之を讀むて見ますと、女の音ニヨを反切すればノに歸納し、媧の一音ウワにて、約音アでありますから、女媧即ちノアであります。乃ち以色列神活の諾亞と同名なのであります。其の神話の概は淮南子に、天柱碎け地維缺くとある如く、天地の大事變であつて、大洪水に遭遇したものに相違ありません。そこで女媧は、天を補ひ地を補ひ、蘆灰を聚めて滔水を止めたといふのであります。西方神話の諾亞に一致するのであります。この神話は、西方から東方へ來たものであるか、東方から西方へ傳へられたものであるか、人々の判断に存するのでありますが、私は我々祖先の神話が、西方へ運ばれて、後にイスラエル民族の神話となつたものと想ふのであります。

之を我が古事記に見ても、伊邪那岐・伊邪那美の伊邪を延言しますと、イスラとなり、イスラを約言しますとイサとなるが、一大奇異であります。即ち以色列之岐は男神であり、以色列

之美は女神である。この伊邪の延言イスラが、彼等イスラエル族の原稱となつたものと想はれます。

されば伊邪那岐・伊邪那美の二尊が、天の浮橋に立たせられた時は、全世界は水底に在つたのであります。如何に縮圖したものととしても、大八洲だけが水底に在つて、他は盡く陸背を露はしてゐたとは考へられません。之を西方では、諾亞の洪水といひ、我々の祖先は、女媧の滔水といひ、後これが大八洲に縮圖されても、猶其の風概は存して居たのであります。して其の大八洲といふのも、本と謂はゆる日の本だけのことでなく、全世界こめての大八洲であつたのです。それが縮圖された上では、淡路島の隣嶼か、オノコロ島でもありませうが、大陸に存した祖語のオノコロは、謂はゆるの大崑崙がそれでありませう。祖語の其の垂跡は、諸方にあつたものらしく、芝罘の近傍にも、大小二坐の崑崙山がありました。それは兎に角、眞の大崑崙は本と理想のもの、名はあれど實の得られぬ者でしたが、漢の代に西域に使した者が、これこそ大崑崙なれと、或る一坐の高山に之を擬定してしまいました。しかしそれも常に移動して、眼界が遠きに及べば及ぶほど、山の位地も遠くなつて、遂にペルシャや小亞細亞に想望するやうになつた。この事は姑くここに止め、またの機會を待つことに致しませう。



本日の演題<sup>レ</sup>辰<sup>ツ</sup>縫考は、古今を貫き東西に及び、廣範圍に涉つて研究を要する事でありませぬので、一夕の講演に盡せる事ではありません。従つて申上げ來つたことも、誠に不得要領に果てましたのは、遺憾並に慙愧に堪へません、おわびを申して終りいたします。

上古に我が祖語の本地及垂跡 終

### 後にしるす

後世の歴史家が、東洋民族の思想史を叙するに方つて、昭和年代初頭に於ける、日本民族の一大躍進を看過する譯にはゆかないと思ふ。この原因を民族思想の如何なる點に結び付けてあらうか。これは歐米民族の低級な倫理性に對して、我等のそれが餘りに泥み難いといふ點もあらうが、それならば、どうして今日まで彼等に對して、隨喜盲從、殊に外交には奴隸的に屈服せしめられて來たか。或は之を歐米族が先天的に優秀なりとの繆想に致されたもの、或は神機未熟に處せしむるの天意なりなども説くであらう。

最早今日の日本は、上下擧つて一大決心をなし、有らゆる方面に於て夫々偉大なる自覺の域に達し、又達しつつあるものと思ふ。そこで我が民族の伏能としての實行性は、獨立滿洲國の出現に於て存分證據立てたのであるが、これはほんの序幕であらう。

大亞細亞經綸について、滿洲國の獨立が序幕であると同様に、我が日本民族の自覺も、成る程舊來の事實に比すれば思ひ切つた躍進ではあるが、矢張り序幕相當の自覺である。もし皇謀



に就いての進展が、どこまでゆくか見極めが付かぬといふならば、皇民族の自覚も、段階を限るといふ譯にはゆかない。そこでこの小冊子が、民族的自覚に關し、學問的根據を提供するといふことであれば、それは我等が東大神族の宗系であるといふ事であらう。

黃河流域の先住者であつた太古族が、伏羲神農黃帝以來、堯舜禹湯等は勿論、この流域の南方北方東方地區に亘れる古族を包括して、所謂東大神族であつて、其の宗系が實に我等日本民族であつたといふことが、言語學的に確證せられた以上は、儒教の眞髓が漢民族を置き去りにして、我が大八洲オホヤマトに来て花を咲かす所以をも解し得やう。何となれば孔孟の教は、彼等が東夷の人であつた計りではなく、元々東大神族たる堯舜の教を祖述したといふので、その人生觀社會觀等は、この大神族の精神文化の土臺の上に築かれたものであるからである。この事は我等の自覺に高めねばならぬ重要な事實である。

更に或る研究家は、釋迦は、太古に於て南下した、此の神族の一派なる、塞族出であるといふ科學的論斷を立て得たとの事である。實に民族心理の傳統は不滅のものである。蓋し佛教は皇國に完全に受け容れられて、消化し盡されたが、歐米人が却つて今日まで、其の醍醐味を掬し得ざるの氣の毒さは、民族心理上由來する理由がなくては叶はぬ事と想ふ。

翻つて眼を西方に轉じ、波斯灣頭に於ける太古のスメル族を観れば、是亦此の東大神族の一派に外ならずとするは、此の民族の原始故郷を何れに措くを問はず、彼等の先驅は東方から西進したものである事と、アナウの古都が、一萬年以前非遊牧的平和の市民であつたといふ實證と對比して、決して盲斷に墮した見ではあるまいと思ふ。それ故に、スメル族の文化傳統の下に人となつたイスラエル族の名祖以來、初期の同族が保有してゐた心理——祖先崇拜、家族主義、神の選民思想、自族の信仰確持等、幾多東大神族とその共通點を有する所以も、亦理解せらるゝ次第である。唯後代の彼等が、全然外道鬼と墮したのは、別の理由に因ることである。

ナイルの太古の文化や、クリート島のそれ等も、素より、或はミューの東漸文化を加味したものとはいへ、スメル文化の西漸を否認し得ない以上は、太古に於ける東大神族の繁衍は、宛かも全世界に其の種子を蒔き付けたかの觀がある。これは何事を暗示するであらうか。學徒は其の一局部を捉へて、言擧げに熱中もするなれ、靜かにこの神族の有する民族的信仰の本義を大觀するときは、眼前に提供された驚くべき學問的證據に因つて、其の間に潛める幽契を心解するに到るであらう。

斯く考へ來るときは、現時の歐米民族の縦に流れて來た血脉中に、果して何の尊ぶべき根柢







神體として、太陽神表徴思想の歸一せる關係が、特に東大神族の耀々たる氣分を感得せしむるのである。

爰に於てか即ち東大神族の王者の特質として、此の顯著なる神・王・祭主兼具の靈想が、現時では之が皇國にのみ限られて儼存してこそ居れ、想を堯舜の古代に馳せて、當時の東大神族が、是等王者の下にまつろひつゝあつたことに及ばず、我が國體の本質が、如何に尊き存在であるかは贅言の餘地なき次第である。

西方にあつては、神は夙に超越して空想的のものとなり、高僧も王を離れて豫言者となり、法王となり、然も王を制壓して、終に多くは王を廢し、民間の口利きを引き出して大統領に据えることとなり、信仰生活と俗生活の二重生活を餘儀なくするに到つた歐米人が、この三位一如の圓融せる國家生活を理解し得やう筈がない。幸に太古から一貫不動の皇國が、この理想を以て、大陸古族の祖先の神靈に呼びかけ、臨むに東大神族たる同血同族同信の古へを偲ばしむるの誠を以てすることが、大陸經綸に於ける精神的自覺の一ではあるまいか。

然らば東大神族が有する、此の帝王の特質に關する信仰は、どんな將來を約束し得るといふのであるか。手短かに謂へば、これが地上人類の國家生活社會生活を織り成すに就いて、到り

得た最高なる眞善美であるのである。これを以て全世界の人類に對し押し出して往かなくて何とするものぞ。この信仰を永遠に亘つて強めしむることが教育の骨髓でなくてはならぬ。國體の尊嚴も國權の主體もここから出て來るのである。祭政一致もここから來るのである。政治の形相、權力の案配もここから割り出さるのである。洵に萬世一系といふ有りがたき事實も、この意味に於て、無限の幽契、宏大な天意が擔はしめられつつあるといふ事を悟るであらう。

東大古族學會にて

有 賀 成 可 識



祖光 濱名寛祐著

契丹古傳詳解 菊版 約四〇〇頁 近刊  
 契丹古傳本文 菊版 約三〇〇頁 近刊  
 東大古族言語史鑑 菊版 約七〇〇頁 近刊

右は滿蒙研究に關する、偉大なる學的權威たるは勿論、大亞細亞の經綸上、民族的血族的に必讀の書、殊に言語學關係に於ける北斗星たるの觀がある。

東洋の祕典、清朝の實物たる契丹古傳とは、抑も何事を敘述しあるか。先づ其の古傳本文を一見せよ。

索引

(漢字下の片假名は祖語としての讀万その之なきは近音に従ふ。)

ア	阿加往來……………五〇	悠久イク……………元	晏食オソ……………四
	惡沱アサ……………五〇	イスラ……………三	おぬし……………四
	豈……………五一	井市イチ……………一八	オノコロ島……………三
	安孺子アマシ……………四八	豕(亥)猪兒イノコ……………五	大國主……………四
	蟻アリ……………五一	猶未不イマダ……………三	乎來オレ……………三
	あんたくさい……………三〇	一イル……………三	音語往來……………四
イ		殷叔……………六	力
	伊尹……………セ	ウ	離常カウソ……………六
	不可以イカヌ……………三	云ウ……………六	高僧王……………九
	可以イク……………三	大人ウシ……………四	麴闕カケ……………三
		有諸ウソ……………二	加佐往來……………三
			可復カハ……………三
			加波往來……………三



鑄釜カマ	六〇	鏡ク	六六	藝社	七三
蘿荷カブ	六〇	空桑	七三	斷ケリ	六二
神族カラ	六六	久延比古	七〇	軒轅氏	六九
拘邪カラ	六六	陸岸クガ	七三	言語組立の例	三三
加羅カラ	六六	幾庶クサイ	七三	立宗の勅	五二
獲カリ	六三	公孫クシ	七一	古音	四二
キ		楠稻田比賣	七〇	孤塗コト	六八
鬼谷子	四一	君子クシ之國	八一	去洋コス	二〇
箕子	七四	雲助民族	八八	コソ	元
鑄釜	五〇	鶴鷗クロ	四三	社コソ	七一
匈奴語	六八	黃帝	六九	其諸コソ	元
鬼夷區子	四一	華胥	七一	公孫コソ	七〇
虛字詞の例	七〇	願	三三	華胥コソ	七一
ク		ケ			

空桑コソ	七二	寂し	四四	縉聶伊邇氏	七七
藝社コソ	七三	參齋サリ	二	辰沅殷	六八
忽コル(邑)	六三	沝游サユ	三	辰沅殷王國	六八
コレシキ(コ)	三三	戲歌 <small>まはら</small>	七〇	辰沅纒考	六八
サ		山海經	八〇	東大國君靈	六八
さうてくさい	三〇	三信條	一	辰沅纒翅報	六七
桑林の野	三五	三位一體の帝王	九	縉聶刀曼氏	七〇
沝涸登方サカノボリ	三	シ		肅慎	七〇
犠牲ササ	五	臣雲シウ	五	珠申	七〇
獻酬サス	五	辰沅シウ	六七	思幽	八〇
佐太往來	七〇	縉聶(匈奴)シウ	七	辰沅の靈語	六九・七三
多(澤)サハ	七〇	縉雲(黃帝)シウ	三	鮮克	三
澤梁サハ	七〇	神由(神農)シウ	六	臣智	六五
瓊尾サビ	四三	單于(匈奴)シウ	六	折丹	二四



志那都比古神……………二四  
 巽ニシメ……………三三  
 壽安鎮國之山……………二四  
 主音……………三六  
 辰國……………三五  
 清皇室の上諭……………七七  
 神頌……………六七  
 神族……………六六  
 神農……………六九  
 神王……………六九  
 神・王・祭主一如……………六九  
 主基……………七〇  
 澡禊スキ……………二二  
 桑林スキ……………二五  
 勦スキ……………六〇  
 鎡基スキ……………六〇  
 紹末スキ……………六〇  
 桑林スキの野……………三五  
 スク……………二〇  
 縮 スク・スグ……………九  
 鮮克斯スコシ……………三  
 スメル族……………六七  
 雪神……………三  
 單子……………六  
 諸有ソウ……………三〇  
 贈賄の詔書……………五  
 祖語の大本地……………三  
 祖語發掘の七要義……………三七  
 將母ソモ……………二七  
 將母已也ソモイナ……………二七  
 巽二……………三  
 太昊伏羲……………三  
 大辰の歴史……………五  
 大陸回復の神秘的因縁……………七  
 湯沐……………二五  
 湯沐の邑……………二五  
 高原神……………四  
 嵯踏綿 タタミ……………三六

太那往來……………四  
 丁寧タノむ……………三  
 珠矛戟 タマホコ……………四  
 タヤ往來の音則……………二  
 撐犁タリ……………七  
 多利志比孤 タリシヒコ……………六  
 晝裏眠阿塗 タリミコト……………九  
 男陰……………三  
 ダンベ……………三  
 朝鮮 チウシ……………五  
 鳥夷 チウチ……………四  
 筑紫……………八一  
 邾婁 チュロ……………三  
 女陰……………三  
 女媧……………三  
 陟登紙 チリガミ……………三  
 離チれり……………三  
 冢塚ツカ……………六  
 木菟ツク……………四  
 訓狐ツク……………四  
 鴟鵂ツク……………四  
 東口ツク之山……………八  
 靺鞨ツラン……………九  
 丁靈ツラン……………九  
 通克斯……………六・八  
 ツンボ……………四  
 丁寧再三……………三  
 鳥夷……………四  
 寺テラ……………六  
 時ト……………六  
 處ト……………三  
 東國翅報シフ……………七  
 東大語……………四  
 東大國皇……………七  
 東大古族の言語……………四  
 東大古族の君靈……………七  
 東大神族……………八  
 東大神族國家の特質……………八



寧可ドウカ……………三三  
 寧諸ドウゾ……………三三  
 時幾トキ……………三六  
 菟突……………四二  
 刀爾トニ……………五六  
 登乃往來……………五五  
 遐不トホカラズ……………四四  
 登與往來の音則……………三三  
 突厥トルキル……………六二  
 ナ  
 不ナ……………三三  
 ニ  
 二汗落ニカラ……………七七  
 二重生活……………九〇

入聲尾韻と東語……………六一  
 又  
 孚甲メカ……………四七  
 稗穰メカ……………四七  
 馮メク……………四六  
 夫子メシ……………四六  
 孺子メシ……………四六  
 沼予メボコ……………四九  
 沼真メマ……………六四  
 瀦孟メマ……………五五  
 ネ  
 願ネギ……………三三  
 寧求ネギ……………三三  
 寧求ネギ……………三三

九八  
 ノ  
 女媧ノア……………六二  
 持戴ノセ……………四〇・五  
 登方ノボる……………五五  
 吞ノム……………五五  
 登ノリ……………五五  
 乘ノリ……………五五  
 勅ノリ……………五三  
 陟ノリ……………六三  
 則ノリ……………六三  
 德ノリ……………六三  
 陟釐ノリ……………六三  
 鈍閔ノロ……………五五  
 鈍魯ノンピリ……………五五

纒雉……………四二  
 庖犧……………七四  
 暴虎馮河……………四六  
 巨抗力……………三三  
 墻垠ハカ……………六〇  
 原田ハタ……………六二  
 薄田ハタ……………六二  
 腹ハラ……………六二  
 暴ハル……………四六  
 弁那(匈奴)ハンナ……………七七  
 ヒ  
 纒雉ヒキ……………四二  
 風后ヒコ……………七〇

比賣古曾神社……………七一  
 彼蒼方向ヒサカタ……………五三  
 フ  
 風后……………七一  
 風神……………三三  
 孚甲……………四七  
 落……………四四  
 菟突フキ……………四四  
 菟流離フクロ……………四四  
 巫覡……………四四  
 巫支祈フシキ……………四四  
 覆幬フタ……………四〇・五  
 ホ  
 蕃登……………三三

陰戸……………三三  
 本地の發掘……………九  
 マ  
 貿交マカル……………一八  
 貿市マチ……………一八  
 孟豬マメ……………四四  
 明豬マメ……………四四  
 望豬マメ……………四四  
 孟瀦マメ……………四四  
 滿珠……………七七  
 滿洲……………七七  
 ミ  
 靡不ミナ……………三〇  
 御中主……………九

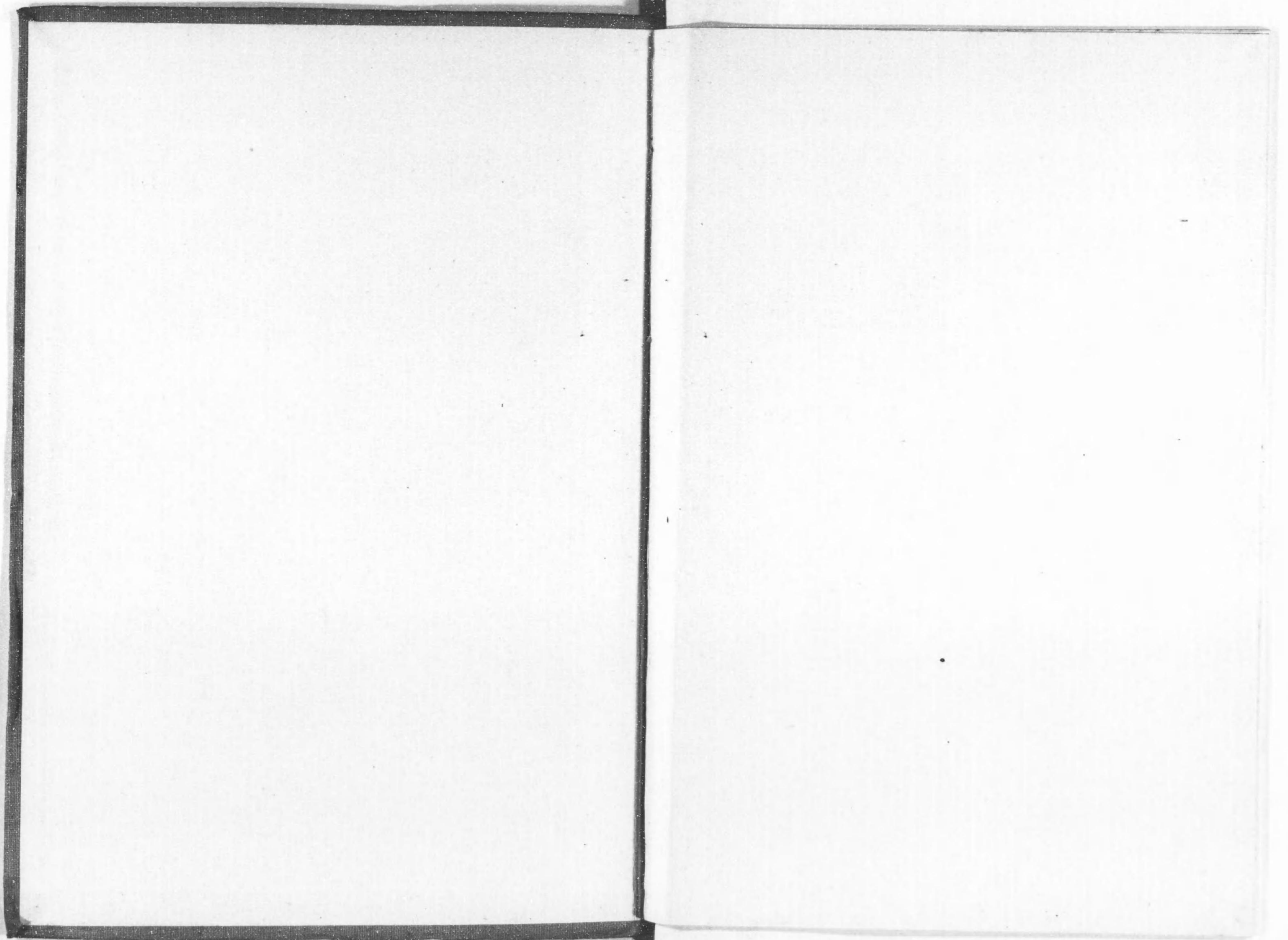






頁行	八の二	四四の四	四四の五	五三の一三	六七の一	六九の二	八〇の二	八二の四
誤	食	充 <sup>ソ</sup> 耳 <sup>ガ</sup>	ず	令	報義	雲	不婁	女は
正	貧	充 <sup>ソ</sup> 耳 <sup>ガ</sup>	て	令	報其義	縉雲	不婁	女媧は







終

